

木俣雅晴

オーギュスト・ブランキの革命思想

2020年12月

## 目次

はじめに	1
第一章 フランスの二月革命と初期社会主義思想	5
第一節 サン＝シモンとサン＝シモン派	8
第二節 フーリエとフーリエ派	10
第三節 カトリック的社会主義	12
第四節 『アトリエ派』	15
第五節 イカリア共産主義	18
第六節 プルードン	20
第二章 オーギュスト・ブランキの革命思想	25
第一節 1848年革命前のブランキ	25
第二節 第二共和制下のブランキ	31
第三節 ブランキの革命思想 － 「革命独裁」	39
第三章 天体による永遠	48
第一節 星雲の起源と彗星	49
第二節 永劫回帰と相互依存 － 直線行程の歴史観とキリスト教批判	51
第三節 世界の永遠	52
第四章 キリスト教救済史観の近代的変容	56
第一節 キリスト教の歴史観	56
第二節 アウグスティヌスの歴史神学	58
第三節 『共産党宣言』と「史的唯物論の選ばれた民」	60
おわりに	66
文献目録	69

はじめに

1968年5月、パリ大学の学生たちの反乱は、「パリ五月革命」とよばれた。3日、ソルボンヌ校に結集した学生たちによって、カルチエ・ラタンのサン＝ミッシェル大通りに築かれたバリケード<sup>1</sup>から発した私たちの熱い政治の季節は、瞬く間に世界に波及し、日本における学生運動も燎原の炎のごとく全国的な広がりを見せた。その時に、最もよく先頭で闘ったものたちは、一揆主義者、無思想肉体派、ブランキスト—この言葉の意味するものは、理論を持たない素朴かつ直情的な行動家 —とパルタイから揶揄されてきた。これは、

ブランキは、がんらい政治革命家であり、人民の苦しみに同情をいやく、感情のうえだけの社会主義者であるが、彼は社会主義理論も持たなければ、社会救済の一定の実際的提案も持っていない。その政治活動の面では、彼は元来「行動の人」であり、適当な時期に革命的急襲をころみる、すぐれた組織をもつわずかな少数者が、最初の2、3回の成功によって人民大衆をひきつけ、こうして革命を成功させることができるという信念をいやく人であり……ブランキは過去の時代の革命家である<sup>2</sup>

と、エンゲルスが評したブランキ批判に端を発している。さらに、ブランキ(Louis-Auguste Blanqui, 1805-1881)の思想をつたえる著書は、死後に刊行された『社会批判』(*La Critique Sociale*, 1885)と『天体による永遠』(*L'Éternité par les astres, hypothèses astronomiques*, 1872)の二冊であり、他には当時の機関紙などの定期刊行物、演説手稿、ノート等が残されているのみである。ゆえに、我々が入手することが可能な翻訳された著書は、『社会批判』を含む『革命論集』と『天体による永遠』のみである。このため、彼の思想にふれる機会が著しく少なかったために、いまだにブランキスト—一揆主義者

<sup>1</sup> 西川長夫『パリ五月革命私論』、平凡社、2011、p.99-103。

<sup>2</sup> エンゲルス『ブランキ派コミュニオン亡命者の綱領』、マルクス＝エンゲルス全集 第十八巻、大内兵衛他訳、大月書店、1968、p.522。

という評価は、われわれの間に定着している<sup>3</sup>。しかし、ブランキの母国フランスにおいては、第二次世界大戦後マルクス主義的立場からはガローディ(R. Garaudy、1913-2012)が、また、非マルクス主義的立場からはドマンジェ(M. Dommanget、1888-1976)が、ブランキの思想を再評価している。かかる、ブランキ評価を踏まえ、エンゲルスによるブランキ批判の経緯を、19世紀までたどってみることにする。

カール・マルクス(Karl Marx、1818-1883)とフリードリヒ・エンゲルス(Fridrich Engels、1820-1895)は、社会の歴史は階級闘争の歴史、つまり生産手段を有する「支配階級」と生産手段を有しない「被支配者階級」間の闘争史であると述べている。ジュレミ・ベンサム(Jeremy Bentham、1748-1832)とジョン・スチュアート・ミル(Jone Stuart Mill、1806-1873)の功利主義を理論的主柱としている資本主義の暴走を止めるために、労働者階級は、資本家階級を組織された暴力で打倒し、労働者階級の独裁による共産主義社会の実現によって階級闘争は消滅する。つまり「生産力と生産関係」の矛盾を止揚するための変革が歴史の必然であるとする「史的唯物論」を、二人は主張した。

エンゲルスは、『反デューリング論』(*Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft*,1878)を基にした1880年の著作『空想から科学へ(の社会主義の発展)』(*Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft*)においてオーエン(Robert Owen、1771-1858)、サン＝シモン(Comte de Saint-Simon、1760-1825)、フーリエ(François Marie Charles Fourier、1772-1837)の三人を評価しながらも、空想的社会主義者と揶揄している。ところで「空想」は原文のドイツ語では「Utopie=ユートピア」、原義の「“Nirgendland”=どこにも存在しない所」<sup>4</sup>は、十六世紀イギリスのトマス・モア(Thomas More、1478-1535)の著作『ユートピア』(*Utopia*、1516)を基にしているが、当時の辞書によると「ユートピアは、どこにも存在しない空想の国を意味すると同時に理想的な統治プラン全体をも意味した。さらに、最も広い意味では、それは、幻想とか実現

<sup>3</sup> 柴田道子「十九世紀フランスの革命思想－オーギュスト・ブランキを中心として」、岩間徹編『変革期の社会』、御茶の水書房、1962、はしがき参照。

<sup>4</sup> 相良守峯『SAGARA GROSSES DEUTSCH-JAPANISCHES WÖRTERBUCH』、博友社、昭和49年。

不可能な計画あるいは夢想を意味した<sup>5</sup>。」

フランスの哲学者ポール・リクール(Paul Ricœur、1913-2005)は、「イデオロギーは権力を正当化する試みであるのに対して、ユートピアはつねに、権力を別の何ものかで置き換えようとする試みなのである<sup>6</sup>。」つまり、「権力についての創造的変更」であると述べている。

一方、ポーランド生まれの社会思想史家ブロニスラフ・バチコ(Bronisław Baczko、1924-2016)は、「未来を予測するユートピアの夢が」はたして「歴史の歩み」と結びついているのか、そして、現在の不安やディレンマに対して将来与えられるであろう解答を、どの程度まで告知しているのかを問うてみる必要がある<sup>8</sup>と指摘している。

さて、19世紀初頭の思想家サン＝シモン、フーリエ、ビュシェ、ラムネー、コルボン、カベ、プルードンたちは、労働者がおかれた悲惨な状況を打破すべくいかなる思想を構築し、かつその思想が表象する理想社会を獲得するために、いかなる実践を行なったのかについて、第一章「フランスの二月革命と初期社会主義思想」では、ブランキの思想と実践に対比しつつ論じ、相違を明らかにする。第二章「オーギュスト・ブランキの革命思想」では、エンゲルスの、ブランキは秘密結社に集う少数者による急襲を旨とする、理論を持たない行動の人で、過去の世代の革命家にすぎないとの評価は不当であるとの視点に立脚し、ブランキが、革命家としての自らの思想を磨き上げた七月王政下および二月革命期の論文、文書、並びに著作『社会批判』等を中心に、ブランキ特有の、国家論、革命独裁論、人民総武総論を基軸にブランキの革命思想を分析する。特に「デクラセ」概念の詳細な分析から、「パリの独裁」の主体を「武装せる労働者」、換言すると、パリの労働者層をプロレタリアートとよびつつ人民＝民衆と捉え直し、知的に覚醒したすべてのプロレタリアに加えて、プチ・ブルジョア知識人および教育者 - 労働者の解放のために闘うブルジョア階級からの逸脱者 - にかかれたものとみていることを明

<sup>5</sup> B・バチコ『革命とユートピア』、森田伸子訳、新曜社、1990、p.31。さらに457頁で、バチコは、社会の方向へと向かう特別の志向を帯びた想像力を「社会的想像力」と規定し、社会的想像力は、「私たちに自己と他者のイメージ化された表象を与えるばかりでなく、社会の全体的なイメージと共に、それを構成する制度や集団、あるいは位階や社会階層などについての具体的なイメージをも与えてくれるのであると述べている。「ユートピア」の傍点は原文のママ、及び『革命論集』p.6 凡例2に「原文イタリックおよび太文字表記の箇所には原則として傍点を付した」とある、以下同じ。

<sup>6</sup> ポール・リクール『イデオロギーとユートピア—社会的想像力をめぐる講義』、ジョージ・テイラー編、川崎惣一訳、新曜社、2011、p.417。

<sup>7</sup> 同上、p.431。

<sup>8</sup> ブロニスラフ・バチコ『革命とユートピア』、森田伸子訳、新曜社、1990、p.1-2。

らかにする。第三章「天体による永遠」では、幽閉者が唯一の希望を「枝分かれの章」に観た『天体による永遠』を「永劫回帰」の理念を基軸に考察し、反進歩史観、および反西欧中心史観などのブランキの革命思想の根源を探究する。最後に、レーヴィットが展開する「近代の歴史哲学は、〔神の約束の〕成就を信ずる聖書の信仰に端を発したものであり、結局においてそれは、それ自身の終末論的な世俗化にゆきつく」という観点から、ブランキの革命思想の根底における歴史観＝永劫回帰理念が、キリスト教救済史観の近代的変容の一つであるマルクスの思想とはその根本で相違していることを第四章「キリスト教救済史観の近代的変容」で論じ、明らかにする。以上、ブランキの革命思想の見直しおよび再評価を目的とし、もって私たちが熱く燃えた1968年の、未だ未完の総括を再開する一助となることを期待して本修士論文を作成する。

なお、この修士論文は、私の2017年度慶應義塾大学文学部の学士論文「オーギュスト・ブランキの革命思想」に加筆、修正を加え、さらに第一章に第六節「プルードン」を、および第四章として「キリスト教救済史観の近代的変容」を新たに加えて完成した。

## 第一章 フランスの二月革命と初期社会主義思想

19世紀初頭、「社会主義<sup>9</sup>」という概念は「個人主義」に対立する言葉として生まれた。つまり、「レッセ・フェール(laissez-faire)」、「為すに任せよ」と、個人の経済活動に対する「自由放任主義」が結果として公共の利益を増進するという、すべてを個人に還元する「個人主義」に対立する考え方が「社会主義」である。

都市に居住する手工業職人を含む地方都市の繊維工業を中心とした、いわゆる工場労働者を労働者階級と呼ぶと、なかでも、繊維工業に従事する労働者は困窮の極みに置かれ、労働者と家族は文字通り穴倉で生きねばならず、そこで生まれた多くの子供たちには死が待ちかまえていた。この実情をアドルフ・ブランキ<sup>10</sup>(Jérôme Adolphe Blanqui、1798-1854)は、『リール市とノール県の労働者階級<sup>11</sup>』(1849)において同市のサン・ソヴール地区を取り上げ、労働者と家族は、地下二、三メートルにある日光も空気もろくに入らない穴倉に住んでいる。加えて、下水、便所などの著しい非衛生的な住環境によって肺結核、チフス、コレラが蔓延し極めて劣悪な状況におかれていた。乳幼児の死亡率は高く、「貧困以外のもので、人生の初めでこのように死んでしまう原因になるものがわが国にはいったいあるだろうか。こうした災禍にたいしては防護策が必要だ。二万一〇〇〇人の子供のうちで、二万七〇〇人が五歳以下で死ぬなどとは、いつの日かフランスでは言えなくなるようにしなければならない<sup>12</sup>」というゴスレ医師の訴えを引用し、労働者とその家族がおかれた悲惨な状況を告発している。

フランスにおける、産業革命の揺籃期において資本主義の成長に伴い、没落しつつあるアトリエ主と手工業職人たち。さらに、劣悪な労働条件と悲惨な生活環境に置かれた

---

<sup>9</sup> 松田昇「サン・シモンにおける『社会』概念」、大阪産業大学産業研究所所報 8、1-10 1985、p.1-3要旨 「19世紀前半のフランスは、ラテン語 socius に語源をもつ'social'(社会的)、'société'(社会)に関連した用語や造語」をつぎつぎに登場させた。特にsocialisme(社会主義)という言葉が、少なくとも社会科学の意味で用いられたのは、ピエール・ルルー(1797-1871)が「雑誌『百科全書評論』」のなかで1843年に発表した論考『個人主義と社会主義』が初出である。それ以前にも、「1831年11月23日付の週刊誌『種蒔く人。宗教・哲学・文学ジャーナル』」や1832年2月13日付の『地球』にすでに用例がみられるが前者は宗教的文脈で後者は文学的語感をもつもの」と松田昇は述べている。

ルルーは、ロマン主義運動の拠点となった「グローブ」紙の創設(1824)に尽力し、自らは「百科全書評論」等を主宰した。特に、ジョルジュ・サンドとの文学的・思想的影響関係は有名である。彼女の教養小説『歌姫コンシュエロ』(1842)は、ルルーの哲学的著『人類について』(1840)の小説版といわれることがある。(『フランス文学史』小倉孝誠編、慶應義塾大学出版、2016、p.122-124参照。)

<sup>10</sup> 19世紀フランスを代表する経済学者の一人、オーギュスト・ブランキの兄、[www.takachiho.jp/lib/booklist\\_01](http://www.takachiho.jp/lib/booklist_01)、2017.09.19.閲覧。

<sup>11</sup> 河野健二編『資料フランス初期社会主義』、平凡社、1979、p.4-10。

<sup>12</sup> 同上、p.10。

労働者とその家族たち。かれらは、自らのおかれた状況から脱けだそうと、さまざまな変革の思想に刺激を受けていた。サン＝シモンは「普遍的協同」、フーリエは「労働の組織化」を、ビュシェは「キリスト教的産業組織」、カベは「共有制社会」をかかげ理想社会、ユートピアを求めた。

マルクスと同時代のドイツ人である国法学者ローレンツ・シュタイン(Lorenz von Stein、1815-1890)は、1840年、プロシヤ政府派遣の研究留学生としてパリを訪れ、「フランスにおける社会主義と共産主義の思想潮流に深い関心をよせ」、マルクスとはまったく異なった角度から、1842年に著作『今日のフランスにおける社会主義と共産主義』(*Der Socialismus und Communismus des heutigen Frankreichs*)を出版し、「第一級の分析」としての評価を得た<sup>13</sup>。シュタインは、この著作でサン＝シモン主義とフーリエ主義に代表されるフランスの社会主義、共産主義さらにプロレタリアートなどの概念をドイツに本格的に紹介した。社会主義は、産業の組織化の体制を社会の組織化として求め実現しようとする知的かつ物質的な作業の総括であり肯定的である。一方、共産主義は、大衆の力による破壊と革命によって、自己実現を図ろうとし、現存社会に対しまったく否定的である<sup>14</sup>、と定義し、シュタインは共産主義を不気味で恐るべき存在と否定的に評価している<sup>15</sup>。

また、「フランスでは純粋に政治的な運動の時代は終わった。それに劣らず真剣で強力な別の時代が準備されている。前世紀末には国民の一身分が国家に反抗したが、いまや国民の一階級が社会を転覆することを目論んでいる。つぎに起こりうる革命はいまや社会革命でしかない<sup>16</sup>」と、フランスにおける労働者階級を社会変革の主体と見なし、労働者階級の心情を革命へと突き動かす社会運動とは何かと問いかけている。加えて、「社会革命とは何か。それは何を求め、またどこへ向かうのか。それは政治革命とどう

---

<sup>13</sup> シュタイン『平等原理と社会主義』(*Der Socialismus und Communismus des heutigen Frankreichs.*)、石川三義、石塚正英、柴田隆行訳、法政大学出版社、1990、p.445-446参照。  
原書名の和訳は『今日のフランスにおける社会主義と共産主義』であるが内容に鑑み『平等原理と社会主義』とし原書名を副題としたと凡例にある。

大井は、本書の解説で「プロレタリアート、社会主義、共産主義などという新語がフランスから響いてきた当時のドイツでは、それをまとまった形でドイツに伝えてきたのがこの一八四二年発行の『今日のフランスにおける社会主義と共産主義』であった。」また、この著作の果たした役割が画期的であったと当時の書評に現れている、と述べている。(『平等原理と社会主義』、解説 大井正 p.640-645参照)

<sup>14</sup> 同上、p.166参照。

<sup>15</sup> 同上、p.15-16。

<sup>16</sup> 同上、p.3-4。



違うのか。つまり社会とは何であり、国家とどう関わるのか<sup>17</sup>」と述べ、革命に関わる社会と国家の関係を分析しようとしている。

ローレンツ・シュタインによると、サン＝シモン主義は、「直接的な実践的社会実験であり」、「産業を現実的に組織して、無産階級が物質的に自立するのを助けようと試みようとする」。一方、フーリエ主義は「社会科学」であり、「絶対的な諸原理を一般的に承認されるところまで高める理念に基づく。新しい労働秩序がその最小限度の収入と享受を各人に対し確保しうるのは、この承認によるのである<sup>18</sup>。」これらの根底には「物質的占有での平等原理」があり、サン＝シモン、フーリエ共に「この課題の解決を自分の人生の真の目的だと表明していた」とフランスの社会主義を肯定的に分析する一方、前述のごとく共産主義を強く批判している。

また、所有についてシュタインは、「所有に関する現代の根本的誤りは、所有に対する現在の権利を絶対的なもの、まったく必然的で普遍的なものともみなすことである」と分析し「どの大改革もみな同時に所有の改革であり、また一般に所有権が対象から少しずつ離れて行くこと」を歴史が示している、と述べている<sup>19</sup>。

「数千年の昔からこんにちに至るまで共同存在の揺るがしえない基盤として有産者と無産者によって維持されてきたこの人格的所有権は、はたしてそれに生命力を与え維持させてきたような真のモメントを自らのうちに含みもっているか否かという疑問<sup>20</sup>」を解決すべく、揺るがしがたい論理をもって、「所有は、正義の法廷においてであろうと人間の使命の前においてであろうと、それ自体が不正であることを立証せんとしている<sup>21</sup>」思想家プルードンに対して、大胆かつ内面では真に偽りなき人物である、とシュタインは、積極的な評価を与えている。<sup>22</sup> 加えて、プルードンは「所有それ自体のことを盗奪<sup>23</sup>」と呼び「所有とは、……強者による弱者の搾取である。一方、財産共同体は弱者による強者の搾取である<sup>24</sup>。」と主張していて、抽象的平等の概念から生まれ

---

<sup>17</sup> 同上、p.4。

<sup>18</sup> 同上、p.263。

<sup>19</sup> 同上、p.237。

<sup>20</sup> 同上、p.387。

<sup>21</sup> 同上、p.388。

<sup>22</sup> 同上、p.388。

<sup>23</sup> 同上、p.397。

<sup>24</sup> 同上、p.398。

た個人的自由という原理の必然的、かつ否定し難い帰結として、国家自身による国家の廃棄、あらゆる人格性の完全に統一なき並存にほかならない、という命題を提起している<sup>25</sup>、とシュタインは分析している。

## 第一節 サン＝シモンとサン＝シモン派

『産業者の教理問答』(*Catéchisme des industriels*,1824)でサン＝シモンは、封建制を支持するのは、新旧貴族のほかに、それに寄生し、それに土台を提供する中間階級、すなわち法律家、平民の軍人、金利地代取得者などからなる「ブルジョア」である。それに対して産業者は、農業、工業、商業などの三つの社会集団に従事する人びとで、社会のあらゆる富の源泉である。それゆえ、封建階級に対する産業者階級の勝利、「支配的、封建的、軍事的制度から管理的、産業的、平和的制度へ」の移行は、まさに歴史の基本的方向である<sup>26</sup>、と産業者階級の勝利と体制の変革を説いている。

さらに、サン＝シモンは「産業者階級は基本的階級であり……これなしには他のいかなる階級も存続することができない<sup>27</sup>。」それゆえ、科学も道徳も、すべて産業と産業者階級のために存在理由を持つことになる。しかも人類の歴史は、産業体制の確立へと向かって進行している。また、文明の歴史は、旧体制としての神学的封建的体制から中間的過渡的体制である形而上学的法律的体制を経て、科学的産業的体制へと進行しているという。未来が科学的産業的体制であるなら、この歴史の進行は促進されなければならない。その担い手は、国民の大多数を占める農・工・商業者、つまり「国民の二十五分の二十四以上を構成<sup>28</sup>」する産業者階級である。さらに、全産業者が国王に誓願書<sup>29</sup>を提出して国王を「産業者階級の第一位の産業者<sup>30</sup>」、つまり首長とし、そのもとに「財政最高委員会を創設する。そして、この委員会を最も重要な産業者によって構

<sup>25</sup> 同上、p.401。

<sup>26</sup> 五島茂、坂本慶一責任編集『世界の名著 続8 オーウエン サン＝シモン フーリエ』中央公論社、1980、p.55。

<sup>27</sup> 同上、p.426参照。

<sup>28</sup> 同上、p.308。

<sup>29</sup> 同上、p.361-378。

<sup>30</sup> 同上、p.365。

成<sup>31</sup>」し、この委員会に公共事業の計画や財政の管理に関するいっさいの権限をまかせ  
るべきである。このような体制を「産業的君主制<sup>32</sup>」と呼び、科学的産業体制を樹立す  
ることにより貧困や、経済の組織化などのさまざまな課題を解決できる最も現実的な方  
法であると考えた。

サン＝シモンは、新たに権力を握った者たちが振るう暴力と、断頭台に顕著に表現さ  
れるフランス革命の負の遺産の解消、暴力革命を拒否し階級の調和により国王を戴く  
「産業的君主制」に「ユートピア」を求めた。

ロドリグ、バザール、アンファンタンなどのサン＝シモン主義者は、『サン＝シモン  
学説解義』(*Doctrine de Saint-Simon*, 1830)において、「敵対と普遍的共同」についての人  
類の歴史における「一貫した傾向」を次のように要約している。「協同組織の範囲が拡  
がるにつれて、人間による人間の搾取が減少し、敵対はしだいに激しさを失い、そして  
人間のすべての能力はしだいに平和の方向に向けられていったのである<sup>33</sup>」と。サン＝シ  
モン派によれば、勤労者たる産業家に対して、個人的にではなく社会的に信用を提供す  
る銀行を設立することもまた、「普遍的協同」を実現するための方策である。事実、こ  
のベレールの提案は、第二帝政期の一大投資銀行たる「クレディ・モビリエ」となって  
結実した。

サン＝シモン派は、七月王政下の階級状況を「貴族や聖職者などの支配する有閑人」  
階級、およびそれを補完する中間階級である「ブルジョア」に対して、非支配階級を「産  
業人」階級と規定している。この「産業人」とは「有閑人」をのぞいた全国民を含む概  
念で、資本家的企業家という部分的階級と捉えていない。同派は、資本家と労働者を未  
分化のままにしている<sup>34</sup>。加えて、封建階級に対する産業者階級の勝利は歴史の基本  
的傾向と捉え、階級融和の上に全産業者の請願によって国王を抱く「産業的君主制」に  
「ユートピア」を求める平和的禪譲路線である。ブランキの革命論との相違点は、まさ  
にこの点にある。

私たちは、ブランキの革命論について第二章で詳細に分析する。ここでは19世紀初期

<sup>31</sup> 同上、p.337、p.307の答で、「最も重要な産業者」とは「社会のあらゆる成員のうちで、実際の管理に最大の能力を示し」かつ「平安の維持に最も関心をいだいている」人々と記している。さらに、この文献の序にあたる「ユートピア社会主義の思想家たち」の58頁で坂本慶一氏は、産業者階級を代表するものは銀行家であると述べている。

<sup>32</sup> 同上、p.368。

<sup>33</sup> 河野健二編『資料フランス初期社会主義』、平凡社、1979、p.70。

<sup>34</sup> 柴田三千雄『近代世界と民衆運動』、岩波書店、2001、p.156。

社会主義者たちの主張と大きく異なる、ブランキの革命思想の特徴点を以下に記す。

ブランキは、七月王政下の階級状況を「労働手段」を独占する少数の「有閑者」と大多数の「労働手段を奪われた」プロレタリアート、換言すると「資本と労働」との対立と規定している。彼は、この相対立する二階級間の非和解性ゆえに、フランス初期社会主義者たちの主張する協調主義つまり「中庸主義」を認めないと明言している。ブランキは、革命を抑圧された民衆の情念が爆発する瞬間ととらえ、彼の革命論は階級対立の非妥協性を基礎におく階級国家論、つまり「国家は富者の憲兵」であると規定することから出発している。人民は、組織された暴力をもって国家権力を奪取し既存国家機構を解体する。そして、共和制を経て共産制にいたる間の過渡期の政権は、「ブルジョア国民軍」を「全面的武装解除」する一方、「すべての労働者を武装させ、民兵に編成すること。」すなわち、人民総武装であり「武装せる労働者で覆われたフランス」、すなわち過渡期における政治形態として「パリの独裁」を彼は主張している。つまり過渡期における革命的独裁と全人民総武装がブランキの革命論の特色である。

## 第二節 フーリエとフーリエ派

『産業的共同社会的新世界』(*Le nouveau monde industriel et sociétaire*,1829)においてフーリエは、「文明社会」の諸矛盾の根源には、「農業の分散細分化および商業<sup>35</sup>」において文明人を地獄に突き落とす「産業主義」の存在がある<sup>36</sup>と、サン＝シモンが説く「産業主義」、つまり復古王制期の資本主義を次のように論難している。

産業主義は、われわれの科学的妄想のうちでもごく最近のものである。それは、比例的報酬についての何らの方式ももたず、また生産者もしくは賃金労働者が富の増大の分け前に与るための保証を何ひとつももたずに、雑然と生産を行う精神錯乱である。だからわれわれは、産業の盛んな地域が、この種の進歩とは無縁な地方と同じくらいに、いや恐らくはそれ以上に多くの乞食で満ち溢れているのを目

<sup>35</sup> 五島茂、坂本慶一責任編集『世界の名著 続8 オーウエン サン＝シモン フーリエ』中央公論社、1980、p.449。

<sup>36</sup> 同上、p.73。

にするのである<sup>37</sup>

と。フーリエは、「産業主義」を妄想であり、精神錯乱であると強く批判している。ここで彼は、生産は整然と行わなければならない、報酬は適正に配分されるべきであると主張し、さらに「資本、労働、才能」という三つの能力に応じて<sup>38</sup>富は配分されるべきであると、主に富の配分の問題について批判的に自説を展開している。

加えて、フーリエは、ニュートンの「万有引力の法則」が自然界において作用しているごとく、人間社会には、「情念引力<sup>39</sup>」の法則が存在していると主張している。情念引力の法則によって「文明社会」は終焉し、「共同社会」が到来する。それは「試験的ファランジュ<sup>40</sup>」の建設をもって始まる。このファランジュとは、フーリエが考える「千八百名<sup>41</sup>」によって構成される理想的な共同社会で、一人当たり一ヘクタールの農地を所有し共同宿舎で生活する。つまり、生産と消費にかかわる生活共同体であり、農業アソシアションである。

「フーリエ」と題するフェストーの詩は、「フーリエは永遠の穹窿にふたたび昇る。そこは神の近く調和の住む所……統一の梯子を一段登ると、人間は神に近づく。フランスの息子らよ、石を運べ人類の神殿に<sup>42</sup>」とフーリエ主義のイメージを新しい宗教として描いている。「キリスト教は人類の偉大な宗教である。キリスト教は発達可能であり、また、さらにいっそう、そしてつねに発達するであろうことは確実である<sup>43</sup>」と、キリスト教を肯定しつつ、自らを救世主になぞらえるフーリエは、労働にたいして人びとが抱く嫌悪感を取り除き、魅力ある労働を実現するためにはどうすればよいのかを教える。「フアラシステール」と名付けた理想社会の共同宿舎において、労働は今日とは正反対の諸条件のなかで行われ魅力的なものとなり<sup>44</sup>、「ファランジュ内での統一や調和や労働の組織化<sup>45</sup>」という高い目標が実現されると、フーリエは説く。

---

<sup>37</sup> 同上、p.472。

<sup>38</sup> 同上、p.484。

<sup>39</sup> 同上、p.495。

<sup>40</sup> 同上、p.516。

<sup>41</sup> 同上、p.446。

<sup>42</sup> 河野健二編『資料フランス初期社会主義』、平凡社、1979、p.154。

<sup>43</sup> 同上、p.135。

<sup>44</sup> 同上、p.125。

<sup>45</sup> 同上、p.130。

さらに、1837年フーリエ没後、フーリエ派の領袖となったヴィクトル・コンシデラン (Victor Considérant、1808-1893)やフーリエ主義者たちは、機関紙『ファランジュ』 (*La Phlange*)を『デモクラシー・パシフィック』 (*La Democratie Pacifique*,1843)に改題した。生前にフーリエが、ファランステール建設資金の提供者を座してまっていたことから一歩踏み出し、積極的に自派の主張を世論に訴えようとした。改題の理由として、神と人類の大義のもとに「人間精神は、弱者や悩める者や被抑圧者の斬新的解放、平和、そして諸国民の協同をかちとる<sup>46</sup>」ことをあげている。以上のように、同派は、「産業の組織化、資本・労働・才能の自発的協働」を手段に「革命によらない社会進歩、全体の豊かさ、秩序・正義・自由の実現」の旗を掲げて<sup>47</sup>同志の獲得を目指し、ファランステールに「ユートピア」を見ている。

フーリエ派は、民衆の困窮状況の根本的な原因を「産業主義」＝資本主義にとらえ、資本主義を痛烈に批判している。同派は、資本主義のもたらす富の偏在を解消するために、富は「資本、労働、才能」によって適正に配分されるべきであると主張するが、そこにおいて資本家と労働者は、未分化のままである。この社会経済状況の改革は、人間界に存在する「情念引力」の法則によって「産業主義」は終焉し、未来の「共同社会」は、「神と人類の大義のもとに」「産業の組織化と資本等の自発的協働」によって建設できると述べている。さらに「人民の利害と政府の利害とは根本において同一のもの<sup>48</sup>」であり二者間には誤りのみが存在すると考え、革命によらず平和裡に民主主義原理と両立する立憲君主制への移行が可能である<sup>49</sup>と主張している。ブランキの革命論との相違点は、まさにこの宗教を許容し、「情念引力」の法則に則り「被抑圧者の漸進的解放、平和、そして諸国民の協同」を築き上げることが可能と主張する点にある。

### 第三節 カトリック的社会主義

フィリップ＝J＝B・ビュシエ (Philippe-Joseph-Benjamin Buchez、1796-1865)は、『フ

<sup>46</sup> 同上、p.133。

<sup>47</sup> 同上、p.144。

<sup>48</sup> 同上、p.139。

<sup>49</sup> 同上、p.142。

ランス革命議会史<sup>50</sup>』(*Histoire Parlementaire de la Révolution Française*)第三二巻序文において、フランス革命が目指した「物質的幸福」を追求すること<sup>51</sup>により人びとが、陥らざるをえないエゴイズムを、「幸福はかならずや自分自身の欲望のために他者を犠牲にするよう言いかせるはずである。」「各自は自分のために行動し、だれも他人のために考えたりはしない」<sup>52</sup>とキリスト教的「善や献身の立場」、かつカトリック的社会主義の立場に立ち、エゴイズムを批判している<sup>53</sup>。

ビュシェは、善や献身の立場に立ち、災いを自ら進んで受け入れるという「キリスト教的モラル<sup>54</sup>」に満ちる社会を実現するためには、不平等を廃絶し、貧困の消滅を図らねばならず、理想の体系を「キリスト教的産業組織<sup>55</sup>」と名付け、産業の価値体系における地位と報酬に関する思想の根本的転換<sup>56</sup>を説いている。その結果、献身が「事物の秩序そのもののなかに議論の余地」なく出現し、「こうして、われわれは地上が、おのおの特殊な労働に従事する農業共同体や製造工場共同体といったもので覆われるのを見てとるだろう」<sup>57</sup>と、ビュシェは主張し、このような「労働における生産共同組織」を創設するためには、「公的信用機関の設立、労働における生産共同組織に関する法律の発布および不動産の動産化<sup>58</sup>」が必須であると説いている。

ビュシェの階級および階級闘争概念は、「都市民衆の大部分を構成する労働者階級の悲惨な状況<sup>59</sup>」を「漸次、解放の道へ」と導く「生産共同組織」と「労働の組織化」<sup>60</sup>を軸としている。一方、彼は国民を「富者と貧者」と二分し、エゴイズムにとらわれた二つの階級のあいだに社会を麻痺させるにちがいない闘争が生まれ、そこでは、一方の党派の他の党派に対する勝利は何らの社会進歩ももたらしはしないだろう<sup>61</sup>と述べ、「蜂起した奴隷たちが主人にとって代わり、彼らをかっけての自分たちの地位にたたき落

---

<sup>50</sup> 同上、p.106 1834年から1838年にかけて40巻が編纂された。

<sup>51</sup> 同上、p.96。

<sup>52</sup> 同上、p.97。

<sup>53</sup> 同上、p.101。

<sup>54</sup> 同上、p.103。

<sup>55</sup> 同上、p.104。

<sup>56</sup> 同上、p.102。

<sup>57</sup> 同上、p.102。

<sup>58</sup> 同上、p.104。

<sup>59</sup> 同上、p.88。

<sup>60</sup> 同上、p.90。

<sup>61</sup> 同上、p.97。

とそうとするような革命<sup>62</sup>」を批判している。加えて、ビュシェは、革命がもたらす「産業上の混乱」を「死や飢餓に等しい災い」と危惧している<sup>63</sup>。つまり、彼は階級関係を「富者と貧者」と二分化してとらえ、貧困の原因をエゴイズム、つまり「レッセ・フェール＝為すに任せよ」に求め、解決を「産業の価値体系における地位と報酬に関する思想の根本的転換」として能力に応じた報酬と、利潤を社会的資本の形成および労働に応じて配分する生産共同組織＝アソシアシオン－キリスト教的善や献身に満たされた人々で構成される－の普遍化に求めている。

ビュシェと同じカトリック教徒であったフェリシテ＝ロベール・ド・ラムネー (Félicité-Robert de Lamennais、1782-1854)は、『人類の過去と未来について』 (*Du Passé et du l' Avenir du Peuple*,1841)において、人民の未来の問題を解決する方法は、あらゆる人間のために「自由と平等のキリスト教的権利」を実現することによってプロレタリア階級を消滅させることにある<sup>64</sup>と述べている。「自由の本質的条件である」「所有」は、プロレタリアとは無縁であるゆえに、「プロレタリアが自分に欠けている所有をつくりあげ、かくして自己の解放を完成させるにいたる方法を決定すること<sup>65</sup>」が解決すべき課題であると、ラムネーは主張している。したがって、私的所有を否定し、「国家の手における所有の絶対的集中」をはかる共産主義や社会主義の学説は、国家を唯一の所有者として絶対化する「普遍的な奴隷制」に帰着すると批判している<sup>66</sup>。

ラムネーの階級概念は、「キリスト教の教えの連続的な発展の結果」、奴隷は「プロレタリア階級」へと解放されたというものである。この階級は「権利」をもっていないが、「独立した真の人格」を有しているという点において、奴隷の身分とは異なっている。一方、「プロレタリアと奴隷にはほとんど等しく自由の物質的条件や所有が欠けているという点において」、プロレタリア階級は奴隷の身分と見分けがつかない<sup>67</sup>と規定している。そこで、プロレタリアは、自己に欠けている所有をつくりあげることで、自己の解放を獲得できると、彼は主張している。ラムネーは、社会を改革するためにプロレタリアの団結、加えて「請願書の山」をもって専制を打倒し「法の制定に参加する」

<sup>62</sup> 同上、p.98。

<sup>63</sup> 同上、p.101。

<sup>64</sup> 同上、p.113。

<sup>65</sup> 同上、p.113。

<sup>66</sup> 同上、p.114。

<sup>67</sup> 同上、p.113。



という政治的権利を獲得することを、人々に訴えている。このように、富の不正な配分を漸進的に改善すれば、社会は次第に公正になる<sup>68</sup>と明言している。

ビュシェはエゴイズムに、ラムネーは所有に、民衆の困窮の原因をあげ、前者は善や献身的立場にたち「生産共同組織」と「労働の組織化」の全国的展開を、後者は自由と平等のキリスト教的権利の上に立ち団結と請願運動をもって、両者ともに漸進的な改革を進め、未来の社会を獲得しようとしている。ブランキの革命論との相違点は、階級把握の曖昧さから国家を階級支配の道具であると認識できないことおよび、両者が、社会を漸進的、平和的に改善することが可能であると主張し、かつ実践する点にある。加えて、ブランキは、キリスト教を民衆を抑圧する黒服を着た軍隊であると断罪したが、カトリック的社会主義たちは、教義における「善や献身」あるいは、「自由と平等」を謳う点にある。

#### 第四節 『アトリエ』派

1830年以降の労働者運動において「戦闘的な姿勢を示した」仕立工・靴工・家具工などの「開放的」職種の熟練職人<sup>69</sup>は、自らを組織化するための結合原理として、「アソシアション<sup>70</sup>(association)」概念を導入している。この「『アソシアション』とは自由な主体としての個人が自らの意思で結合することを意味して」いる<sup>71</sup>。「アソシアション」によって「労働者の組織は職能別・ローカル別の個別利害の擁護を越えて、全労働者の連帯を掲げることが可能となった<sup>72</sup>。」

1840年9月に創刊された『アトリエ』(*L'Atelier*)紙は、ビュシェのカトリック的社会主義の影響を受けた印刷工クロード・A・コルボン(Claude Anthnie Colbon、1808-1891)を中心に「専ら労働者により編集」されていた。同紙に自らの思想を表現すべく集った労働

<sup>68</sup> 同上、p.121。

<sup>69</sup> 同上、p.90。

<sup>70</sup> associationとは(1)会、団体、協会、組合、結社、(2)協力、提携を意味する。『ロベール仏和大辞典』、小学館、2008。『資料フランス初期社会主義』では、associationは「共同組織」「生産協同組合」p.285、「協同組合」p.287、「生産共同組織」p.320、と和訳されている。

<sup>71</sup> 柴田三千雄『近代世界と民衆運動』、岩波書店、2001、p.321。

<sup>72</sup> 同上、p.321-322 家具工・建築工・靴工・仕立工・パン屋などの開放的職種の職人たちは、三十年以降の労働運動のなかで最も戦闘的な姿勢を示し、自由な主体としての個人が自らの意思で結合することを意味するアソシアション(association)という考えを自らの組織に導入した。これによって、労働者の組織は職能別・ローカル別の個別利害の擁護をこえて、全労働者の連帯を掲げることが可能となった。

者活動家は、「アトリエ派」と総称されている<sup>73</sup>。同派は『アトリエ』紙の創刊にさいして、「労働者の境遇を根本から認識するには自分が労働者であらねばならない」と趣意書において宣言している。「将来的な改善の出発点は道德原理の中にある。それはわれわれの父たちのモットー『自由、平等、友愛、団結』を要約しており、人民主権という政治原理、協同という産業原理はこれに起因している。したがって、われわれの開かれた機関紙は、人民主権実現の唯一の手段たる選挙改正、および労働生産物の公正な配分の手段たる産業の協同を告知するであろう」と<sup>74</sup>。つまり、政治原理としての人民主権と、産業原理としての共同（＝アソシアシオン）を結びつけ、普通選挙によって「民衆的な政府」を樹立し<sup>75</sup>、共同の普遍化をもって社会改革を実現することを主張している。

アトリエ派のアソシアシオン論＝協同組織論は、資本家を排除し労働者のみで組織された生産共同組織をもって、中間搾取の廃絶を目指すとともに生産手段と資本を労働者自らのものとしようという趣旨である。特に、労働者が保有する資本は「譲渡されえないもの」、かつ「分割されえないもの」と規定している<sup>76</sup>。さらに、同派は、労働者生産協同組織に必要な三つの条件<sup>77</sup>、(1)「資本家の完全排除」、(2)「協同組織間の互助」、(3)「直ちに適用可能なこと」をあげて、特にフーリエ派の理論を「資本家の収益分配への参加を認めている」として厳しく批判している。さらに「イカリア派」が主張するアソシアシオン論を、「直ちに適用可能なもの」ではないとして切り捨てている<sup>78</sup>。

アトリエ派の運動論は、「漸進的な解放という道へ善良な労働者たちを導く目的のもとに……労働のアソシアシオン＝共同組織<sup>79</sup>」の結成を目標としている。さらに、政治理念として共和主義を、社会経済理念としてはアソシアシオンを掲げ、「社会改革は民衆的な政府によってしか行われえないものであり、また民衆的な政府は普通選挙によってしか生まれえないもの<sup>80</sup>」と主張し、政治改革が社会改革に先行すべきと断言して

<sup>73</sup> 編集代表田村秀夫・田中浩『社会思想事典』、中央大学出版部、1982、p.143。

<sup>74</sup> シュタイン『平等原理と社会主義』、石川三義・石塚正英・柴田隆行訳、法政大学出版局、1990、p.527-528。

<sup>75</sup> 河野健二編『資料フランス初期社会主義』、平凡社、1979、p.294。

<sup>76</sup> 同上、p.285-287「生産共同組合契約プラン」。

<sup>77</sup> 同上、p.281。

<sup>78</sup> 同上、p.282-283 フーリエ派、イカリア派共産主義を批判している。

<sup>79</sup> 同上、p.285参照。

<sup>80</sup> 同上、p.294。

いる。しかし、「産業の改革」＝労働の共同組織建設と「政治の改革」＝選挙改革に同時にとりかかるべき<sup>81</sup>と訴えている。

アトリエ派の特色は、労働者の権利を確立することにより、資本家が労働者階級を搾取、抑圧するための強力な手段である労働者手帳制度<sup>82</sup>を強く批判している点にある。さらに、同派の革命観は、「社会の頂点で稲妻が炸裂するのを見たいとは思わないわれわれは、必要不可欠な社会改革をゆっくりと巧みに準備する政治改革の成就を心から祈る<sup>83</sup>」と述べていることから、非暴力的行動による漸進的な解放という道をへて、アソシエーションの普遍化をはかるというものである。

六月蜂起とその敗北が醒めやらぬ7月5日、議会では『アトリエ』派のコルボンの提案による「労働者生産協同組織助成法」が可決され「七月五日法」として成立した。しかし、共同組織には当初から反対していたティエールらも賛成した同法の内容は、『アトリエ』派の構想を骨抜きにした「極めて微温湯なものであり、とくに雇主である製造業者に融資の口実を与えるなどの弊害をとまなうものであった<sup>84</sup>。」

以上のように、同派は、階級関係把握の曖昧さを有するゆえに、臨時政府多数派に巧妙にからめとられ、高まる階級間の緊張を緩和する役をはたすべく、臨時政府内少数派として労働者階級の不満のはげ口に利用されたといえる<sup>85</sup>。

<sup>81</sup> 同上、p.283。

<sup>82</sup> 同上、p.37-41「労働者手帳に関する陳情書」参照。労働者手帖制度については、平實『フランス労働者政策史論』、晃洋書房、1976、p.145-165 参照「労働者団結禁止法の発布」と「労働者手帖制度の実施」によると、1791年6月発布されたル・シャブリエ法によって同職組合の廃止、労働者から団結の自由を剥奪し、個人的自由競争の嵐の中にフランス労働者は放逐された。加えて1803年12月布告による、いわゆる「労働者手帖制度」によって、労働者の移動の自由や労働の自由を労働者は奪い取られた。警察署長などが、手帖を交付するものとされた。同法令は、1890年7月に廃止されるまで、労働者を雇用主に隷属させる手段として存在した。

<sup>83</sup> 同上、p.295-296。

<sup>84</sup> 河野健二編『資料フランス初期社会主義』、平凡社、1979、p.466参照。

<sup>85</sup> 4「労働者生産共同組織助成法—七月五日法」、河野健二編『資料フランス初期社会主義』所収、平凡社、1979、p.397-404 参照。1848年7月5日「労働者生産協同組織助成法」を国民議会は満場一致で採択した。アトリエ派のコルボンが、原案の提起者であり、彼はまた同法による助成審議会の副議長にも就任した。同審議会にはアトリエ派の印刷工ダンギィ、ビュシエ派のオット、フレゲも加わっていた。同法はアトリエ派が従来主張してきた「労働者のみによる共同組織」とともに、「労働者—雇主間の共同組織をも助成の対象とするもの」であり、アトリエ派の構想からはるかに後退した内容であった。共同組織には当初から反対していたティエールらがこの法案に賛成したのは、労働者から六月蜂起の心理的後遺症を取り除こうとする意図とならんで、この条項の活用で同法にこめたコルボンらの意図を骨抜きにする成算があつたことだったといわれる。同法の運用は貸付の制約があるのにも関わらず、経営不振に陥った小企業の救済にあてられるなど歪曲が多く、ためにコルボンらは、同年11月末から12月にかけて審議会委員を辞任した。

谷川稔、渡辺和行編者『近代フランスの歴史』、ミネルバ書房、2006、p.121-123 参照。デュボン・ド・ルールを首班とする臨時政府は、「議院内政治集団の老獪さと民衆運動の暴発的エネルギーとの微妙な政治力学的バランスの上に立つ、かりそめの均衡にすぎなかった。」臨時政府は、労働者向けの社会政策としてふたつの機関を設けた。労働者のための政府委員会（通称リュクサンブール委員会）と国立作業場である。前者は、ルイ・ブランを委員長としたものの、予算も権限も持たない諮問機関であり、労働組織化省の設置を要求する民衆の圧力をかわすためのものでしかなかった。後者も、名前こそルイ・ブランの社会作業場を思わせるが、小手先の失業対策のほかならなかつた。

以上のように労働者を懐柔するために臨時政府多数派は、様々な策略を行使したといえる。

ブランキの革命論との相違点は、労働者の権利と自立を目指し、資本家による搾取、抑圧を批判しつつも、「自由・平等・友愛・団結」を要約した道徳原理のなかに将来的な改善の出発点がある、と主張する階級および国家把握の曖昧さゆえに、暴力革命を否定し、選挙による政権奪取から漸進的な労働者の解放を目指す点にある。

## 第五節 イカリア共産主義

エティエンヌ・カベ(Étienne Cabet, 1788-1856)は、『イカリア旅行記』(*Voyage en Icarie*, 1840)において、理想国家「イカリア」を、共有性を基礎に完璧に整備された平等社会と描き出している。彼は合法的、大衆的共産主義を主張し、不平等が、貧困を生み出す唯一の原因と断じ、この社会の不平等を解決すべく「イカリア共産主義」を構想している。共産主義という概念で考えられる完全な国家「イカリア」においては、「個人の財産は廃止され、動産・不動産はすべて国民に、つまり社会全体に属している。貨幣は禁止されている。毎日配給が行われ、各人は、衣食等々に必要なものを現物で受け取る。労働は共同で行われ、共同体の各メンバーは、好みと適性にもっとも合致した職業を身につける<sup>86</sup>」のである。すなわち、カベのユートピアにおいては、人びとの食事、衣服、住居、労働、さらに芸術のあり方まで細かく定められている<sup>87</sup>。

カベは、理想国家を樹立するために、運動論として「合法性を守る市民としての勇氣<sup>88</sup>」をスローガンに掲げ、あらゆる暴力的な行動を否定し「合法的手段、世論、一般意志<sup>89</sup>」に訴えること、つまり成功をおさめるために、宣伝と教育により平和的に権力の移譲が可能であると主張している。彼は、「政治社会の基礎をなしている不平等<sup>90</sup>」がすべての矛盾の原因であると断じ、解決策を「すべての構成員が仲間となり、社会の目的のために協力し、……社会の利益と生産物の配分にあずかること」が必要な「共同組織」に求めている。すなわち、人民主権、自由、平等の社会を獲得するためには、「法律が本当に一般意志の表現となること」。すなわち、カベのイカリア共和国建設、

<sup>86</sup> 同上、p.253。

<sup>87</sup> 同上、p.159-172。

<sup>88</sup> 同上、p.246 カベは非暴力主義に徹せよ、弾圧に対しては合法主義を持って抗すべしと主張している。

<sup>89</sup> 同上、p.252。

<sup>90</sup> 同上、p.236。

社会改革は、「すべてが法律によって規定されること」が必要条件であるとし、選挙制度改革を強く訴えている<sup>91</sup>。

19世紀フランスの共産主義思想において、イカリア共産主義の最大の特徴は、暴力革命を否定するところにある。カベは、「共有性国家」の樹立を「説得や確信や世論や国民の意志の力によって、継続的に、漸進的にのみ起こりうるものである<sup>92</sup>」ことを信じて疑わない。彼は、階級対立概念を持たず、イカリアの政治組織を共和制と想定している。この共和制とは、

世襲によるか選挙によるかといった政府の形態にはいっさい関係なく、公共の利益にもとづいて統治され、あるいは運営されるあらゆる国家や社会を共和制と呼び……代議制的で民主主義的で民衆的な君主政は、貴族的共和政よりも何倍も好ましいことがありうる。立憲的な君主を戴く共有制の方が、共和主義の大統領を戴く共有性よりも困難だと言うことはない<sup>93</sup>

と主張することから明らかなように、彼は、階級対立の概念を持たないがゆえに、「公共の利益」に立脚しているか否かを基準とし、世襲制をも許容し君主政あるいは共和政を問わず、国家論に曖昧さを大きく残している。

カベは、「共和制と民主主義を目指すと断言しているこの臨時政府を支持しよう<sup>94</sup>」と革命の翌日2月25日付け『ポピュレール』号外において同志に訴えている。ここで、臨時政府が「共和制と民主主義を目指すと断言している」ことをもって、彼が「臨時政府を支持する」理由としてることに着目したい。さらに、カベは、臨時政府に対し「すべてのフランス人は兄弟であり」、「権利」も「義務」も「平等であると宣言するように要求しよう。」と同志に訴えている。続いて彼は、

友愛、人間性、節度、正義、理性というわれわれの原理を忠実に守って、いつでも、復讐はやめろと叫ぼう。無秩序を許すな、だれも抑圧するな。万人のた

<sup>91</sup> 同上、p.237。

<sup>92</sup> 同上、p.158。

<sup>93</sup> 同上、p.158。

<sup>94</sup> 同上、p.345、p.345-347「イカリア共産主義者へ」と題した『ポピュレール』号外参照。

めの正義を達成するため、確固たる態度をとれ、先見の明をもて、慎重な態度をとれ<sup>95</sup>

と主張している。以上のように、カベの階級融和主義は、「復讐はやめろ」、「だれも抑圧するな」に明らかであり、イカリア共産主義の「友愛」あるいは「理性」という「原理」をもって「正義」を獲得すべく、同志に自重を求めている。

一方、この号外を「臨時政府は全市民の武装と、国民衛兵の全面的な組織化を告知して、民衆の存在を保証している。だから武器を手放すな。……バリケードを放棄するな。……<sup>96</sup>」と結んでいる。カベは、臨時政府に対する全面的な信頼に立脚し臨時政府の「民衆の存在を保証」するとの言をもって、従前の非暴力平和主義から一転して、民衆に対して、「武器を手放すな」「バリケードを放棄するな」と扇動している。

ブランキの革命思想との相違点は、カベの主張する運動論は、合法的手段と世論に訴えることを旨とし階級対立概念が希薄ゆえに、階級間矛盾を説得によって解決可能と確信し暴力革命を否定する点、および、「立憲君主的共有制」をも許容する宥和主義にある。

## 第六節 プルードン

プルードン(Pierre-Joseph Proudhon、1809-1865)は、二月革命に8年先立ち『所有とは何か』(*Qu'est-ce que la propriété?*,1840)を著し、所有の根拠を歴史的、かつ法的に暴き出し、所有とは盗奪であり、強者による弱者の搾取である、と結論づけた。一方、共産制の主張する所有とは、弱者による強者の搾取であると断定し、共産制の正義に根拠を置かず、権威に根拠を置いた法、制度、体制をプルードンは、強く批判している。また彼は、自由は人間の存在にとって必須条件であるゆえに絶対的権利でありかつ、平等も社会的な絶対的権利でありさらに、安全も絶対的権利であると規定している<sup>97</sup>。プルードンは、人間の絶対的権利である自由を束縛する人間に対する人間の統治は抑圧であり、

<sup>95</sup> 同上 p.346 カベの非暴力主義の訴えは、前出の脚注88「非暴力主義に徹せよ、弾圧に対しては合法主義を持って抗すべし」を参照。

<sup>96</sup> 同上、p.347。

<sup>97</sup> プルードン『所有とは何か』、『プルードンⅢ』所収、長谷川進・江口幹訳、三一書房、1971、p.78-79参照。

社会の最高の完成は秩序とアナルシー<sup>98</sup>との結合にあるとし、自由な association 共同社会が可能な唯一の社会形態である<sup>99</sup>、と結論づけている。理想社会を獲得するための革命について、彼は観念の転換すなわち「精神の変動を革命」とよび、単なる観念の変更を進歩<sup>100</sup>と定義している。

さて、プルドンは、「労働の自由は絶対的であるべき<sup>101</sup>」という観点から、臨時政府に対する批判を1848年4月20日発行の『人民の代表<sup>102</sup>』紙において、『労働の組織化』で手を結んだブルジョアジーとプロレタリアによる臨時政府を支配しているのは今や純理派<sup>103</sup>の民主主義であり、「プロレタリアは政府の助けなしに自己を解放しなければならない」と結んでいる。また、3月31日付パンフレット『信用と流通の組織化と社会問題の解決<sup>104</sup>』では、革命の本質は—普通選挙の実施を獲得するといった政治革命ではなく—社会革命であり自由な労働を保証するものでなければならず、そのためには相互性にもとづく「交換における正義、信用の組織化」こそが必要であると主張している<sup>105</sup>。

5月9日付『人民の代表』紙に掲載された論文『政治問題と経済問題の同一性—解決の

---

98 プルドンは晩年の著作『連合の原理および革命派再建の必要について』(*Du principe fédératif et de nécessité de reconstituer le parti de la révolution*, 1863)において、政治秩序は相反する二つの原理「権威と自由」とにもとづいている。一方に「権力の不分割」を基本的な性格とする「権威の制度」があり、他方に「権力の分割」を基本的な性格とする「自由の制度」がある。この自由の制度の一つに「各人による各人の統治—アナルシ」ないし英語で Self Government 自治と、プルドンは定義している。さらに、政治におけるアナルシという観念は「政治機能は産業機能に還元される、社会秩序は単に取引と交換という事実のみに由来する、ということからなりたっている。各人は自分が自身の独裁者だといいうる」と彼は断言している。(『プルドンⅢ』所収『連合の原理』、長谷川進・江口幹訳、p.332-336参照、傍点は原文のまま。)

99 プルドン『所有とは何か』、『プルドンⅢ』所収、長谷川進・江口幹訳、三一書房、1971、p.300参照。

100 同上、p.59参照。

101 1848年3月31日発行のパンフレット『信用と流通の組織化と社会問題の解決』でプルドンは、「労働の自由は絶対的であるべきこと、政府は自由な労働を規制したり制限するするのではなくて、保護するべきことを強く主張している(p.337)。河野健二編『資料フランス初期社会主義』、平凡社、1979、p.333-338に所収。

102 同上、p.315-318。

103 『ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典』(<https://kotobank.jp/word/純理派-78730> 2020年11月1日閲覧。)によると、純理派とは「フランス、王政復古期の政治思想家の小グループ。その中心的メンバーは、P.ロアイエ=コラル、F.ギゾー、H.セーズら立憲王党派の理論家で、その理論的内容は、ロアイエ=コラルによれば、国家権力の根源を人民にも王にも求めず王と国民の合意の結果である「憲章」によって構成された主権のなかに求めるものであった。またギゾーは主権は理性そのものであるとし、その指導的でない手はブルジョアジーであり、社会に散在する理性や倫理の規範の明確化を目標としなければならないと説いた。」とある。

また、「ギゾーは純理派の魂であり、王政復古期から活躍した自由派の理論家であった。彼は、一七八九年の諸原理を認めていたが、全面的に肯定していたわけではなかった。人民主権も君主主権も認めず、主権は理性にあり、という理論をみだした。……これはちょうど、形式的には「フランス人の王」としてふるまいながら、実質的に政府の執行官になろうとしたルイ・フィリップには似つかわしい政治理論であった。」(柴田三千雄他編、世界歴史大系『フランス史2』、山川出版社、1996、「議会と政治」p.470。)

104 河野健二編『資料フランス初期社会主義』、平凡社、1979、p.335-338。

105 同上、p.335-338参照。

方法<sup>106</sup>』においてプルードンは、「現代社会は、全産業と全財産を相互に結びつける流通という、一般的で支配的な事実にもとづいて構成されている」ゆえに「二月革命によって提起された問題は、とりわけ交換的正義の問題、流通、信用、交換の問題であって、作業場の組織化の問題ではない」と、ルイ・ブランの主張する「社会作業所」を批判している。この論文においてプルードンは、古代社会いらい連綿と存続してきた所有は、今や流通の拮抗、社会生活の障害となった。この障害は消滅しなければならない。障害の消滅は、暴力によらず「賠償金をあらかじめ支払って行われなければならないことはよく理解されており、言うには及ばない」と、賠償金による精算を主張している<sup>107</sup>。

プルードンは、この所有という障害を消滅するためには、作業場や労働に直接的に働きかけること、つまり「政府の活動領域を増大させ、抑圧するのではなくて、流通や交換関係が運動する環境を変化させなければならない。それはこれらの関係と運動の法則を変化させることになるであろう<sup>108</sup>」と述べ、自発性の上に構築される、全市民の共同による流通と信用の組織化、換言すると、貨幣の媒介を排除した価値の交換の組織化、交換銀行の創設を主張している<sup>109</sup>。さらに彼は、二月革命を理念なき革命と批判し、労働の組織化に対して、相互性にもとづく流通と信用の組織化を対置している。加えて「暴力や強奪や収奪<sup>110</sup>」を忌避し「プロレタリアにもブルジョアジーにも受け入れられる<sup>111</sup>」建設的で安全な道を模索している。

二月革命期において、プルードンは絶対的権利である自由を獲得するべく、あらゆる権威と抑圧の否定の先に、人民が求めうる最高の社会形態を、秩序とアナルシーの結合である、自由な共同社会 association に「ユートピア」を見ている。そこに至る道は、暴力を忌避し階級融和路線上で、経済構造の漸進的な変革の結果として人民は、社会革命を獲得できるという革命戦略である。

ブランキは国家を「貧者に対する富者の憲兵」、すなわち支配階級が被支配者階級を

---

<sup>106</sup> 同上、p.339-344。

<sup>107</sup> 同上、p.340-341参照。

<sup>108</sup> 同上、p.341。

<sup>109</sup> 同上、p.344参照。

<sup>110</sup> 同上、p.341。

<sup>111</sup> 同上、p.342。



抑圧するための道具である、と規定している。一方、プルードンは、国家の力で社会問題を解決することは不可能と考えた。彼はまず資本、国家、教会を措定し相互に結託し支え合う「絶対主義の三位一体」体制と考える。その内実は、集合的労働は個々の労働の総和以上の集合力を生み出す。一方、所有者支配の体制下においては、その果実は資本の所有者が独占する。このことが不平等を生み出し、労働者の貧困の原因である。国家は、この所有者支配の体制を法的に保障し、かつ力で防衛する。さらに、教会は、所有者と国家への服従を説くという、強固な体制を構築している。ゆえに、国家の転覆では、社会問題の解決を見ることができない、ということがプルードンの主張である<sup>112</sup>。

ブランキの革命思想との相違点は、プルードンの思想の根底には、暴力と収奪の否定と、あらゆる権威と抑圧の否定がある。彼は、「絶対主義の三位一体」体制をのり越えるためには、ブルジョアジーとプロレタリアートにも受け入れられる安全な道を模索し、交換銀行の設立をもって自由な労働を保障する社会革命を第一義と主張する点にある。

さて、19世紀初頭に特徴的な思想傾向である大革命への関心と探究は、「歴史は階級支配の交替から成り立っている」という事実を明らかにした。封建的階級、ブルジョア階級、人民と三つの階級間の対立が大革命の内容をなしているという事実はマルクス以前にフランスの歴史家たちが確認したものであった。しかし、この階級闘争史観は生産力や生産様式の発展に結び付けて主張されたものではなかった。「革命の歴史は、階級のもった志向や理念に結び付けられるか、あるいは未開から文明への推移をえがいた図式のなかに組みこまれて説明された。したがって、階級闘争は不幸な過去の物語にすぎないか、あるいは階級を構成する人びとが誤解をとくか、理念を改めれば、解消されてゆくものであった。社会主義の諸構想はこういう土台の上で構築されたのである。」<sup>113</sup>

私たちが、本章で論じたフランス初期社会主義者たちは、暴力を忌避し、革命を否定し、あるべき社会の原理を association 共同組織・共同社会に求めている<sup>114</sup>。彼らは、少数の特権者である富者＝ブルジョアジーと、多数の被抑圧者である貧者＝プロレタリ

<sup>112</sup> 河野健二編『プルードン・セレクション』、平凡社、2009、阪上孝「プルードン思想の可能性」p.310参照。

<sup>113</sup> 河野健二編『資料フランス初期社会主義』、平凡社、1979、p.444-445 参照。河野は、解説「二月革命の思想的展開」でマルクス以前のフランスにおける社会主義の諸思想について詳細に論じている。

<sup>114</sup> 河野健二編『資料フランス初期社会主義』、平凡社、1979、サン＝シモンは「普遍的共同」、フーリエは「労働の組織化」、ビュシェは「キリスト教的産業組織」、カベは「完全無欠の共有制社会」(p.61参照)を、さらにプルードンは「自由な association 共同社会」を、あるべき社会の原理としての「association」と主張している。

アート間の階級対立の解消を、社会制度あるいは経済制度の改革計画を提示することに終始している。加えて、理性あるいは善と献身に立脚した階級宥和による社会経済制度の変革を、彼らは希求してやまない。

## 第二章 オーギュスト・ブランキの革命思想

1805年に生まれ1881年に没したブランキは、76年の生涯のうち33年余を獄中につながれた<sup>115</sup>。しかし、ブランキは、1830年七月革命、1848年二月革命などの19世紀の主要な革命運動の最前線を担った。特筆すべきは、コムューン蜂起前日3月17日に逮捕され、自らはトーロー要塞のただ一人の幽閉者ながら、彼の革命思想は、1871年パリ・コムューン蜂起に決定的な影響を及ぼしたことである。

そこで、彼の思想が、19世紀の他の思想家たちに比して、国家論、革命独裁論、人民総武装論等の極めて特有な点を有していることに着目し、ブランキの革命思想の形成過程を、まず初めに七月王政期から二月革命を中心に追うことにする。

### 第一節 1848年革命前のブランキ

1832年1月「人民の友協会(La Société des Amis du Peuple)」の15人の指導者に対する、セーヌ県重罪裁判所における、いわゆる「十五人裁判<sup>116</sup>」において、ブランキは、プロレタリアとは何か、さらに「富める者」と「貧しき者」、搾取の構造、共和政体などについて陳述している。彼は、裁判の冒頭、自らの職業を問われ「プロレタリア」と答え「これは自分の労働で生き、政治的権利を奪われている、三千万のフランス人の職業」であり、我々には「生きる権利がある」と主張した<sup>117</sup>。ブランキは、七月王政期の社会状況を「富める者と貧しき者の戦争」であると、対立する階級概念を明らかにしている。「二、三十万の有閑者」にすぎない少数の「富める者」たちは、「飢えた下層民の略奪に脅かされている正当な所有者だ」と言い、大多数の「貧しき者」すなわち「プロレタリアを私有財産に襲いかかろうと身構えている強盗として告発する。」さらに「富める者」が作りあげた搾取の構造を、「人民と呼ばれる原料を庄搾し、何十億という金を吸い上げてわずかな有閑者の金庫にたえず流し込む吸庄ポシブ。二千五百方の農民と

<sup>115</sup> オーギュスト・ブランキ『天体による永遠』、浜本正文訳、岩波文庫、2012、「ブランキ監獄年表」p.137-141。モーリス・ドマンジュ『オーギュスト・ブランキの政治・社会思想』から作成したとの注釈がある。

<sup>116</sup> オーギュスト・ブランキ『革命論集』、加藤晴康訳、彩流社、1991、p.411 訳注 一八三二年「人民の友協会」の指導者十五人が政府批判の文書出版を口実に逮捕され裁判にかけられた、とある。

<sup>117</sup> 同上、p.30-31。

五百方の労働者を一人一人押しつぶし、彼らの最も純粋な血液を搾り取り、特権階級の血管に輸血する、情け容赦のない機械」と表現している。つまり、課税権その他の「法律の独占的制定権」を握っている「特権階級」＝「有閑者どもが、勤労大衆に恥知らずの略奪行為を働いている」と分析している<sup>118</sup>。

加えて、「富める者」についてブランキは、「プロレタリアの汗のおかげで安楽に暮らしている特権者」であり、フランスの「法は、十万の選挙人によってつくられ、十万の陪審員によって適用され、十万の都市の国民軍……これによって執行されている、これら選挙人たち、陪審員たち、国民軍兵士たちは、同じ人間なのである。……立法者であると同時に司法官であり、兵士でもある」特権者、つまり、「権力の買占人」たちである<sup>119</sup>と定義している。

一方、「貧しき者」についてブランキは、「私有財産に襲いかかろうと身構えている強盗」かつ、「特権階級の楽しみと利益のために殺したり殺されたりする剣闘士であり」、「立法、司法、行政の三権」から「締め出されたままである」「三千万のプロレタリア」である<sup>120</sup>と定義している。

さらに、階級対立の非和解性について「富める者と貧しき者の戦争」は、いいかえれば、「王党派と共和主義者」の二つの主義の間の辛辣な闘いであり、そこに「中庸主義」などは存在しないとブランキは主張している<sup>121</sup>。この非妥協的な階級対立は、「もっぱら富める者による貧しき者の搾取を目論んで設けられた」君主主義的君主政体に対する共和主義者の闘いであり、「三千三百万のフランス国民が自らの政府の形態を選び、法を制定する使命をおびた代表を普通選挙によって選出することを要求する」闘い<sup>122</sup>である。この時点において、ブランキは、プロレタリアは「普通選挙」によって「共和政体」を主導的に建設し税制改革を実現できると述べている。つまり、

働くプロレタリアートから取り上げて富者に与えるかわりに、税は有閑者どもから過剰分を奪い取り、金がないために活動できないでいる貧窮した人々全体に、分かち与えられねばならぬ。……税は、公債、この国家の血膿の出る傷口を閉

<sup>118</sup> 同上、p.33-35。

<sup>119</sup> 同上、p.38。

<sup>120</sup> 同上、p.33,38,46。

<sup>121</sup> 同上、p.41-42。

<sup>122</sup> 同上、p.36,42,40。

じるのを次第に容易にするであろう。最後に、有害な株式投資のかわりに国立銀行制度が設けられ……まさしくその時だけ、税は一つの恩恵となる<sup>123</sup>

ような共和政体下の税制を、ブランキは訴えている。以上のような、普通選挙による社会変革は、「栄光の労働者たち」、「パリの労働者の弾丸」は「やむことなく敵を打ちつづける人民の自由と幸福の最後の敵を打ち倒すまでつづくであろう<sup>124</sup>」と、彼は述べている。

1832年の時点において、自らを「共和主義者」と、かつ職業をプロレタリアと宣言したブランキは、「富める者と貧しき者」との対立構造と搾取の構造を明らかにした。王党派主義と共和主義との非妥協的対立関係に「中庸主義」を、彼は認めない。ブランキは、プロレタリアの実力行使を背景にした「普通選挙」をもって人民主権の共和国を建設し、税制の改革を志向しているのである。

同年2月2日、ブランキは「人民の友協会」の会議において『七月革命以後のフランス内外の状況に関する報告』をおこなった。

国家を形成している諸階級間の命がけの闘いの存在に目を覆ってはならない。この事実をよく見きわめれば、真に国民的な党派、愛国者が支持すべき党派は、大衆の党派である。これまでフランスには、三つの利害が存在していた。いわゆるいとも気高き階級の利害、中流もしくはブルジョワ階級の利害、最後に人民の利害である<sup>125</sup>

と、復古王政期から七月革命にいたる政治状況を、三つの階級の利害から分析している。「いとも気高き階級」＝「上流階級」と「中流階級が、等しく権力を分かち合って政府の支配者」となってきたが、シャルル十世は、権力の独占を図ろうとして「ブルジョアの排除に取りかかろうとした。」「一方には、貴族、僧侶、大地主たちに支えられた政府があり、他方には筆と投票用球による戦いの前奏曲を五年間奏でて、殴り合いの準備がととのった中流階級と、十五年間にわたって沈黙をつづけ、局外者だと信じられて

<sup>123</sup> 同上、p.40。

<sup>124</sup> 同上、p.48。

<sup>125</sup> 同上、p.49。

いた人民がいる<sup>126</sup>。」かかる階級状況の中で勃発したこの革命において、人民はすべてを行い勝利者となったが、ブルジョアジーが革命のすべての果実を篡奪し、人民は敗北した。ブランキは、その理由を「戦闘が非常に短かったので、勝利に方向を与えるべき本来の指導者たちが群衆の中から出現する暇がなかった」結果、「大衆は明確な政治的意志をはっきりとは示さなかった」<sup>127</sup>と、七月革命を総括している。さらに、彼は次のように主張している。「正統王朝主義と人民主権」の「二つの原理」が、フランスを二分している。「人民主権の原理は、未来のすべての人々、搾取に疲弊したこの枠のなかでは窒息すると感じてこれを粉碎しようとする大衆を引きつけている。そこには、第三の旗はなく中間項」、すなわち中庸主義は存在しない<sup>128</sup>と。ブランキは、大土地所有者に代表される「大ブルジョアジー」に支えられた<sup>129</sup>ルイ＝フィリップを戴く七月王政を「正統王朝」と評している。一方、ブランキは、相対する人民主権の原理は、搾取を否定しうるものであり、かつ、人民による革命の不可避性を強調し、中庸主義を強く否定している。

しかし、この時期にブランキは、中流階級のなかで少数派である知的職業従事者と自由・平等・友愛を愛するブルジョアは、人民主権の側に味方するであろうと、ブルジョア階級の少数派との連携を示唆している<sup>130</sup>。つぎに、「人民は常に偉大で高潔だから……金銭のいやしい利害には決して従わない。魂の最も高潔な情熱、気高い道徳の啓示に従う<sup>131</sup>」。しかし、「人民というものは大きな動機なしには革命を起こさない。彼らを起させるには強力な梃子が必要だ。最後の時、危機が戸口に迫る時まで、彼らは蜂起に訴えない<sup>132</sup>」と、ブランキは七月王政下の情勢を分析をしている。

ここでブランキは、王統主義と共和主義との闘いであった七月革命を、運動を導く組織の不在と、そのことに伴う運動方針の未提出であると総括している。つまり、「蜂起」の時期の判断について、および、人民を代表する「強力な梃子」としての「大衆の党派」の存在、かつ「大衆の党派」が人民に「勝利の方向」を明確に示すことの重要性

---

<sup>126</sup> 同上、p.52 本文中の訳者注によると「投票用球」とは〔下院で票決に用いられた球〕とある。

<sup>127</sup> 同上、p.53-54。

<sup>128</sup> 同上、p.59。

<sup>129</sup> 柴田三千雄『近代世界と民衆運動』、岩波書店、2001、p.162。

<sup>130</sup> オーギュスト・ブランキ『革命論集』、加藤晴康訳、彩流社、1991、p.60。

<sup>131</sup> 同上、p.58。

<sup>132</sup> 同上、p.63。

を訴えている。

2年後、1834年3月『解放者』(*Le Libérateur, Journal des Opprimés*)紙のために書かれた『スープは作った者が飲むべきである』と題された論文の冒頭でブランキは、「知性と労働」この二つの力は「土地」を利用し「富」を生み出す。土地という必要不可欠な媒介物は、「社会組織の基礎になるべきこと」と定められた「所有権」によって少数の「有閑者」に集中した。法によって定められたこの土地の「所有権」は、「労働によって蓄積され、諸資本……へと拡大された。」この「諸資本はそれ自体としては不毛であり、労働によってしか実を結ばず、……その所有を拒否された大多数の人々は、所有者たる少数のために強制労働を余儀なくされている<sup>133</sup>」として、対立する二つの階級を「富者と貧者」の概念から、「労働手段」を独占する「有閑者」と「労働手段を奪われた」働く者、つまり「資本と労働」との対立概念に歩を進めている。さらに、

隷属とは単に人間の所有物であるとか、土地の農奴であるとかいうことだけではない。労働の手段を奪われ、その所有者である特権者の思いのままになっている者は自由ではないのだ。大衆を奴隷にするのはこの独占であって、かれこれの政治体制ではない。土地や諸資本の世襲が市民を所有者のくびきの下に置いている。彼らは自分の主人を選ぶ以外の自由を持ってはいない<sup>134</sup>

と述べ、労働者にとっての「自由」とは、「労働手段」を奪回すること。すなわち「独占」の打破を明示している。「羊が毛を刈られるのは、その健康のためにである。羊は感謝すべきである」とのような巧妙な「カインとアベルの和解」<sup>135</sup>のごとき協調主義を強く批判し、加えて「所得と賃金の間の死闘」、つまり階級対立の不可避性と非妥協性を訴えている。

人類の歩みは決して停止していない。前進するか後退するかのいずれかである。「その前進は人類を平等へ導く。」しかし、「平等とは農地の分割のことではない」と明言し、続けて、「個人の所有に取って代わる共同体のみが、平等による正義の支配を確立するだろう。かくて、共同体の諸要素を引き出し、明らかにしようとする未来の人々

---

<sup>133</sup> 同上、p.64。

<sup>134</sup> 同上、p.66。

<sup>135</sup> 同上、p.68。

の、ますますふくれあがっていく熱意が生まれる。もちろんわれわれも、この共同の任務に喜んで参加するであろう<sup>136</sup>」と論文を結んでいる。

エンゲルスは、ブランキを「理論を持たない」「行動の人」と評した。しかし、1835年にブランキが出版した『民主的宣伝』<sup>137</sup>において、「大衆を啓発する」宣伝の重要性を説いている。『民主的宣伝』で彼が訴えようとしていることは、「プロレタリアたちが、平等は可能であり、必要なことだと、確信するようにさせねばならない」ことであり、「彼らに、自分たちの尊厳の感情を浸透させ、自分たちの権利や義務がいかなるものかを明確に示さねばならない」ことである。さらに、「政治の変革」は手段であり「社会の変革」こそが目的であることである。つまり、選挙改革は手段であり、目的は「平等の支配」を確立することである。社会の「根底的な再編成なくして、政府の形態のどんな修正も欺瞞となり、いかなる革命も、幾人かの野心家のために演じられる喜劇にしかないだろう」とブランキは主張している。

復古王政を打倒し共和制、すなわち、平等にもとづく「人民自身による人民の政府」を樹立することを目的とする「四季協会(Société des Saisons)」の入会式誓約<sup>138</sup>には、「王政とすべての専制を根絶しかわりに共和制」に移行するには、社会状態が最悪の状況にあるので「しばらくの間は人民は革命的権力を必要とするであろう」とブランキの思想に特有な「革命的権力」を行使することの必然性が説かれている。

加えて、会員に武装の義務と武装蜂起に備えるよう説く一方、会員の「義務の一つは結社の主義を広めることである」と記しブランキは、生涯繰り返し自らの思想を宣伝するための新聞の発行を試みている<sup>139</sup>。これらのことから、ブランキの思想が単純な行動主義であるとの、エンゲルスの批判とは異なるブランキの一面を見ることができる。

1848年革命前、共和主義者ブランキは、七月王政下の階級状況について「労働手段」

<sup>136</sup> 同上、p.70。

<sup>137</sup> 同上、p.390-393「この文書は、日付はないが、ブランキが家族協会を組織していた一八三五年ないし三六年のものと推定されている」と訳者解題にある。

<sup>138</sup> 同上、p.72-74「四季協会入会式」1839年、この文書は筆者不明であり五月十二日蜂起に関して裁判所に提出された警察報告に収められた一文書であると訳注にある。

<sup>139</sup> オーギュスト・ブランキ『革命論集』、加藤晴康訳、彩流社、1991、p.464-465 定期刊行物。ブランキが中心となって発行した新聞、パンフレットのリスト。

(1) Le Libérateur, Journal des Opprimés. Rédacteur en chef: L.-A. Blanqui. 1834.2.2 Numéro unique. : 『解放者』

(2) Les Veillées du Peuple. 1849. 2 numéros. : 『人民の夜明け』

(3) Le Candide. Rédacteur en chef: Gustave Tridon. 1865. 8 numéros. : 『カンディード』

(4) La Patrie en danger. Rédacteur en chef: L.-A. Blanqui. 1870.9.7~12.8 89 numéros. : 『祖国は危機に瀕す』

(5) Ni Dieu ni Maître. 1880.11.20~1881.11.6. 71 numéros. : 『神もなく主もなく』



を独占する少数の「有閑者」と大多数の「労働手段を奪われた」プロレタリアート、いかえると「資本と労働」との対立と規定している。彼が主張する、相対立する二階級間の非和解性とは、フランス初期社会主義者たちが主張する協調主義、つまり「中庸主義」とは相反する主張である。この時、ブランキのイメージする革命は「人民主権」の確立、すなわち「普通選挙」の実施によってプロレタリア主導の「共和政体」を樹立し、プロレタリアートにとって「一つの恩恵となる」税制改革を実現することにあつた。

ブランキは、政治変革の意義を重視しつつも「政治の変革」としての普通選挙は手段である。「社会の変革」、平等の支配の完全な確立が目的である。社会の「根底的な再編成なくして、政府の形態のどんな修正も欺瞞」となるであろう<sup>140</sup>と主張している。

さらに、ブランキの思想に特徴的な点は、「四季協会」入会式誓約にある、共和制を樹立した後の、いわゆる過渡期における「革命的権力」行使の必然性についてである。このことは、第三節「ブランキの革命思想」で論じる。

## 第二節 第二共和制下のブランキ

臨時政府<sup>141</sup>が成立した翌日、1848年2月25日、中央共和協会<sup>142</sup>が発足した集会において「三千の武装労働者<sup>143</sup>」を前に、ブランキは次のようにパリ市民に警告した。

フランスは共和的ではない。遂行されたばかりの革命は、ただ運の良かった不意

<sup>140</sup> 同上、p.300 ブランキが家族協会を組織していた1835年あるいは36年のものと推定されている。

<sup>141</sup> 柴田三千雄他編、世界歴史大系『フランス史 3』、山川出版社、1995、p.82-83参照。臨時政府は『ナショナル』派－自由主義的で非社会主義的な共和派を代表－、と『レフォルム』派－社会主義的思想を部分的にうけいれる民主主義的な共和主義を代表－を中心とする共和派であった。構成は、デュボン・ド・ルール、ラマルティエヌ、クレミュー、アラゴ、ルドリュ＝ロラン、ガルニエ＝パジェス、マリ、マラスト、ルイ・ブラン、フロコン、アルベールの11名である。うち『労働の組織』を著した社会主義理論家ルイ・ブランと『アトリエ』派の機械工アルベールの二人の社会主義者がふくまれていた。

ジャン・カソー『1848年－二月革命の精神史』、野沢協監訳/二月革命研究会訳、法政大学出版局、1979、p.257参照。第六章 脚注(10) 臨時政府構成員リストに総理府長官－デュボン、外務大臣－ラマルチエヌ、内務大臣－ルドリュ＝ロラン等の名がある。

<sup>142</sup> ブランキ『革命論集』、加藤晴康訳、彩流社、1991、p.418 訳注 第二章 1 参照。二月二十五日に「ブランキクラブとして知られる中央共和協会が発足した。このクラブの会員は、七月王政期からの諸秘密結社の活動家が主力であった。しかし、参加は『党派にかかわらず』を原則としており、当初の参加者のうちには、ボードレール、サント＝ブーブ、経済学者オーディガンスらの名も見出される。」ジェフロワ『幽閉者』(p.111-120)には、当日のシテ島のダンスホール「冬のプラド」での情景、さらに中央共和協会における会議の情景が詳細に描写されている。

<sup>143</sup> ガローディ『近代フランス社会思想史』、平田清明訳、ミネルバ書房、1958、p.377 ガローディは「三千の武装労働者とともに、中央共和主義者協会を設立」と記しているが、ジェフロワは『幽閉者』(p.111-112)でシテ島のダンスホール「冬のプラド」に約千人が武器を持って参加していたと書いている。『革命論集』(p.418)訳注には「ブローアからパリに帰ったブランキが、五百人ほどの人々の集会で行ったものである。」とある。ここではガローディの説を参考のした。

打ちというだけだ。……国民軍自体、不本意ながら荷担したにすぎなかった。これは臆病な小商店主たちから成っていて、共和制万歳！ と叫ぶ人々を、これまでは黙認していたが、明日は撃破しかねない<sup>144</sup>

と。ブランキは、この革命は偶然の出来事によるもので、特に指導者と組織の不在について総括している。ゆえに、彼は「クラブ<sup>145</sup>」による人民の組織化と武装蜂起の時を待とう、と武装労働者に行動方針を提起している。

われわれは人民とクラブを持っている。それらのクラブで……革命的に人民を組織しよう。もうしばらく待とう、そうすれば革命はわれわれのものになる！ もしわれわれが、闇夜のなかの泥棒のように無謀な企てによって権力を奪ったとしても、われわれの力の持続を誰が保証するだろうか？ われわれにとって必要なものは無数の人民であり、蜂起した民衆街であり、新たな八月十日<sup>146</sup>である。

「新たな八月十日」を担う主体である「無数の人民」とは、パリの労働者層をプロレタリアートの名でよびつつ「人民」＝「民衆」と捉えなおしたものであった。ゆえに、ブランキは「中央共和協会」という政治クラブを中心にパリの労働者を組織し、蜂起した人民の実力を背景に「革命的権力」を行使する時を待つことを武装労働者に訴えた。

2月25日、民衆が市庁舎へ示威行進を行い、臨時政府の外務大臣ラマルティエヌに対して赤旗を国旗として採用するように求めたが、彼は拒否した。この赤旗の排斥に対してブランキは、翌26日、

赤旗は血の旗だ、と人は言う。それは、この旗をして共和政の軍旗たらしめた殉

<sup>144</sup> オーギュスト・ブランキ『革命論集』、加藤晴康訳、彩流社、1991、p.79。

<sup>145</sup> 前出の脚注142参照。『幽閉者』には、思想が沸騰しパリに数多くのクラブが生まれたとある。

<sup>146</sup> ブランキ『革命論集』、加藤晴康訳、彩流社、1991、p.418 訳注 第二章 2 参照。フランス革命、1792年8月10日の王権の停止宣言、この日「パリの民衆が蜂起し、テュイルリー宮を襲撃して国王を捕え、ついに王権が停止された。」

柴田三千雄他編、世界歴史大系『フランス史2』、山川出版社、1996年、p.367-367参照。8月10日の未明、市庁舎でセクション（選挙を目的としたセクションのことで、パリは四八セクションに区分された。同p.356参照）の代表によって「蜂起コムニオン」が組織され、パリの民衆地区の民主化された国民衛兵が、マルセイユの連盟兵やブルターニュの連盟兵とともに、テュイルリー宮を襲撃した。王宮を守るスイス人傭兵との激しい銃撃戦ののち、王宮は占領された。この事態をまえにして立法議会は、普通選挙による国民公会の招集とそれまでの王権の停止を宣言し、国王をタンブル塔に監禁した。

教者たちの血によってのみ赤い。……その失墜は……人民の死者たちへの冒瀆である。……労働者諸君！ 地に倒れたのは諸君の旗なのだ。よく聞き給え！ 共和制がそれにつづくのはまもないことだろう<sup>147</sup>

と、声明『赤旗のために』を発し、労働者の流した血を象徴する赤旗に対する冒瀆に続き、共和制を失墜させようと企てる臨時政府の反動的傾向に対し、鋭く警鐘を鳴らしている。

さらに、ブランキは、3月2日『中央共和協会の政府への要請<sup>148</sup>』において、共和主義を宣伝するために必須の言論と出版の自由について。人民を組織するために必須の結社と集会の権利および労働者の団結権、旧体制下の治安および法司法官の追放について。人民の武装などを、臨時政府に要求している。なかでも、「職のない労働者を、〔ただちに〕国民軍として武装し、組織し〔そして〕現役中一日二フランの手当を〔いかなる〕例外もなく支給すること。」つまり、人民総武装の第一歩を要求する第八条から、私たちは、ルイ・ブランが説く「労働の組織化」＝「社会作業場」の名をかりて、臨時政府が実施する失業救済事業としての「国立作業場」に対する、ブランキの厳しい批判の視座を見てとることができる。これらの要求は、「ただ運の良かった不意打ち」によって成立した臨時政府を、「人民とクラブ」の基に組織された暴力を背景に「革命的権力」の方向へ導こうとしていると考えられる。

3月5日、臨時政府は、憲法制定議会を招集するための男子普通選挙を実施する布告を行なった。もとより、ブランキは普通選挙を共和政を実体化するための第一歩と主張していた。しかし、普通選挙を喫緊に行うことは、王党派による議会支配に帰結するであろうことを予見したブランキは、3月6日と14日に『選挙延期のための訴え』を行なった。その内容は、この60年間、大衆の教育は常に共和国の敵、反革命の手に握られてきた。それゆえに、「無知」の状態におかれた都市労働者、および農民を啓蒙するために「選挙の無期延期と、各県に民主主義の光をもたらすべき任務を負った市民の派遣を要求<sup>149</sup>」した。とりわけ、地方における農民の置かれた状況をブランキは、危惧してい

---

<sup>147</sup> 同上、p.80。

<sup>148</sup> 同上、p.82 [ ]は原文のまま、凡例にテキストの異同を示すとある。

<sup>149</sup> 同上、p.84。

る。農民が多数を占めている社会状況にあって、保守的農民を啓蒙することが困難であることを認識するがゆえに、彼は選挙の無期延期を臨時政府に要求した。

さらに、

選挙は、もし実施されれば、反動的なものとなろう、……フランスの心臓であり頭脳であるパリは、過去の遺物の攻撃的な帰還を前にして退却はしないからである。パリの住民と、国民を代表していると自任しながらその実すこしも代表していない議会との間に生ずる闘争の忌まわしき結果を考えて見給え。来るべき投票は不意打ちであり、欺瞞である<sup>150</sup>。

かつ、王党派による選挙強行が引き起こす結末は内乱であると述べ、大革命以来革命派の拠点であるパリと、王党派の拠点である農村の決定的な対立の必然を、ブランキは警告している。

3月17日、選挙を強行しようとする臨時政府に対して、選挙実施の延期を求めるデモ当日の『政府に対する要請<sup>151</sup>』には、これまでとは異なり「臨時政府の一部に見られる反動的な傾向」という表現を用い、臨時政府を厳しく告発している。さらに、「人民は王党派の企てと陰謀に抗して」共和主義的純粋性の「道を歩まんとする政府を支持する決意を抱いている」と結び、この日以降、臨時政府に対するブランキの主張の変化を、私たちは読み取ることができる。

3月22日、ブランキは、臨時政府が選挙を強行すると判断し、『パリの民主主義的諸クラブに』と題した宣言文において、臨時政府の欺瞞性を批判し、ブランキが主張する共和制の内実を次のように宣言した。

共和政が政府の一形態を他の形態と取り代えたものにすぎないなら、それは虚偽というものだ。言葉を変えるだけでは十分ではない。事物を変えることが必要だ。

共和政、それは労働者の解放であり、搾取の支配の終焉であり、資本の暴虐から労働を解き放つ新しい秩序の出現である。……

---

<sup>150</sup> 同上、p.87。

<sup>151</sup> 同上、p.88。

パンを持たぬ時、人間に自由はない。貧困のかたわらで富裕が醜聞をまきおこす時、平等はない。母親の女工が飢えたわが子とともに大邸宅の門前に平伏している時、友愛はない<sup>152</sup>。

ブランキは、口先だけで民衆を欺瞞し、実態の伴わない共和制を語る臨時政府に対して、労働者の解放と貧困による飢えを一掃することが共和制の内実であり、それを実現するための政策を具体的に実行すべきであると強調している。

1851年、二月革命3周年の日にロンドンで開催された「平等者の宴会」に向けた『人民に告ぐ』でブランキは、二月革命の敗北の総括をおこなった。二月革命は、

もし人民が理論にばかり熱中して唯一の確実な実践的要素である力を無視するならば、痛ましい流産に終わるしかないだろう！

武器と組織、これこそ進歩の決定的要因、貧困と手を切るための真摯な手段である！ 武器を持つものはパンを持つ。銃剣の前に人は膝まずき、武装せぬ民衆は一扫される。武装せる労働者で蔽われたフランス、これこそ社会主義の出現である<sup>153</sup>。

この内容は、人民は夢を追うことなく、現実を直視すべきである。今、最も重視しなければならないことは、覚醒した人民による組織された暴力である。反革命派「ブルジョア国民軍」を「全面的武装解除」し、かつ「すべての労働者を武装させ、民兵に編成すること。」すなわち人民総武装であり、「武装せる労働者で覆われたフランス」。これがブランキのイメージした「革命独裁」である。

1852年6月6日『マイヤールへの手紙』において、ブランキはブルジョア階級とプロレタリア階級について定義し、二階級間の非和解的対立関係を明らかにしつつ、階級関係を直視せずに中庸主義の道を進んだルドリュ＝ロラン等の『レフォルム』派急進共和主義者を「一団の陰謀家の有力な一派」と、『人民に告ぐ』においては「最も罪深い犯罪者」と鋭く批判している。

---

<sup>152</sup> 同上、p.90。

<sup>153</sup> 同上、p.100。

ブランキは、ブルジョア階級とは

金融業者、商取引業者、土地所有者（先端的大工業も含む<sup>154</sup>）、弁護士、医師、法律家、官吏、金利生活者等、自分たちの所得ないし労働者の搾取により生活している者すべて、すなわち一定の裕福な生活を送り教育もある大抵の個人が含まれる。これにさらに、財産は持っているが教育は全くないという相当数の地方人を加えても、その数は最大限四百万人にしかならない。残るのは財産が全くないか、もしくは取るに足らぬ財産しか持たず、自らの腕で稼いだわずかばかりの収入のみに頼って生きている三千二百万人のプロレタリアである

と定義した。「仮借なき闘争はこの二階級の間にかかるもの<sup>155</sup>」、すなわち「所得と賃金との間の闘い、資本と労働との間の闘い<sup>156</sup>」であり、「革命とは……不平等と搾取の基礎に立つ現在の秩序の消滅、抑圧者の崩壊、富者のくびきからの労働者の解放<sup>157</sup>」であると述べている。続けて、ブランキは「革命は社会主義」である。社会主義とは、世界を正義と平等の基礎の上に再建を希求する、

それら理論の渦巻くるつぼのなかから生まれてくるにちがいない新しき秩序に対する信奉である。それら理論が数多くの点で相争っているのは事実だが、みな同じ目標をめざし、同じ希求に生きているのであり、基本的問題については一致している<sup>158</sup>

「人民はそれら社会主義理論の熱い息吹きに接して、初めて行動に移り、燃え上るものなのだ」「社会主義とはすなわち革命なのだ」<sup>159</sup>、とマイヤールへ伝えている。

ここでブランキは、二月革命期における様々な「流派」の理論闘争と革命を領導する党の有りかたについて述べている。「生ける党」は変動するものであり、「いわば人生

<sup>154</sup> 柴田三千雄『近代世界と民衆運動』、岩波書店、2001、p.151 ここで「特権領主・金融業者・大商人の三位一体（先端的大工業も含む）」と表現している。

<sup>155</sup> オーギュスト・ブランキ『革命論集』、加藤晴康訳、彩流社、1991、p.112-113。

<sup>156</sup> 同上、p.113。

<sup>157</sup> 同上、p.115。

<sup>158</sup> 同上、p.108。

<sup>159</sup> 同上、p.109。

を持っている。」「光は、討論なくしては、さすことがない。……この理論闘争、各流派の対立こそ共和主義の党の最大の武器」<sup>160</sup>であり、

実践的社会主義においては、特別の宗派とかセクトといったものは何もない。実践的社会主義は各種理論のなかから自らに適したものだけを吸収するようにし、いづれかの派に熱中するようなことは全くせず、行き当たりばったりや陰謀家に利するようなことは避けて、運動の展開によって明らかになり、発展し、確立した社会主義によって提示される新しい基盤の上に未来を築こうという確固たる決意をもって採択された原則によって、現存の秩序を打倒しようとするものである<sup>161</sup>

と。ブランキは、諸党派間の理論闘争の重要性を説きながら、「実践的社会主義」とは既存の秩序破壊を一義的目的とするものであり、革命運動の日々の実践と思想の相互展開によって磨きあげられる開かれた思想であると規定している。以上から、ブランキは、原則を堅持しつつ、いわゆる「最小限綱領」による人民のクラブの建設を主張している。ここに、私たちはブランキの思考の柔軟性をうかがい知ることができる。しかし、ブランキは、階級間の非和解的対立関係を明言し、反革命派の全面武装解除、および武器と組織の重要性、すなわち人民総武装こそが、共和制、「自由、平等、博愛」を実現するのものと主張している。

一方、ガローディ等マルクス主義に立脚するイデオログから、ブランキの「民衆」= プロレタリアート概念の曖昧さについて批判を受けている。つまり、彼の「民衆」の把握では「剰余価値の生産者としてのプロレタリアート」と、非抑圧者としての「民衆」とを区別することができなかつたゆえに、プロレタリアが、革命の主体であると規定できなかつたというものである<sup>162</sup>。このことは、彼の経済分析、つまり「資本およびその母、高利<sup>163</sup>」について、分業の発生と交換から説き起こし、どのように資本主義を把握し、批判したのかに帰着する。では、ブランキは、利子、資本をどのように把握してい

<sup>160</sup> 同上、p.110。

<sup>161</sup> 同上、p.123。

<sup>162</sup> ガローディ『近代フランス社会思想史』、平田清明訳、ミネルバ書房、1958、p.407。

<sup>163</sup> オーギュスト・ブランキ『革命論集』、加藤晴康訳、彩流社、1991、p.145-156（「一 高利」）参照、『社会批判』の〔序言〕において、本書は経済学の本ではない「資本およびその母、高利に関するモノグラフィーである」と、ブランキは記している。

たのかについて『社会批判<sup>164</sup>』から考察する。

原始時代の社会は、「個人の孤立」が支配し「物々交換」で成立する自然経済下にあった。交換経済の進展においては、「厳格に正義に則った相互扶助の法律」が求められたがかなわず、「略奪の精神＝利己主義」が交換過程を支配した。同時に、分業の発達は「交換の媒介物」としての「貨幣」を生み出した。この貨幣は、経済に高い便益をもたらす一方、個人的独占によってブルジョアジーの利益とすべく働き、貨幣は「高利、資本による搾取、……不平等と貧困」を生み出した<sup>165</sup>と説明し、加えて、少数者の個人的独占が「資本の蓄積」を推し進めた<sup>166</sup>と展開している。つまり、ブランキは「財産」の起源を「高利貸<sup>167</sup>」に求める一方、「資本」を「貨幣」、「高利」と捉えていた。しかし、ブランキは「高利の起源は過去の闇のなかに見失われている。ただこの略奪形式は、貨幣の使用の始まる前にはその姿を見せなかったものである。たとえ分業があっても物々交換には高利は伴わない<sup>168</sup>」と述べ、ここでは、「高利」の発生根拠を詳細には語っていない。

また、高草木は、次のように指摘している。ブランキの社会批判の根幹は、本来「等価性の保証という役割を負うべき貨幣が、現実の経済社会においては逆に等価交換を破壊するものとして濫用されている」との点にあり、「この等価交換の破壊、つまり高利こそが資本の本性」であり、産業資本による搾取をも高利の一形態と捉えている<sup>169</sup>。つまり、ブランキは「資本の蓄積」を「労働力の剰余価値」に求めるのではなく、「等価交換の破壊」＝高利に求めている。特に、このような点がガローディ等から批判される理由と伺われる。

では、「貨幣」、「高利」として表現される「資本」の搾取が生み出す不平等と貧困から、民衆を解放するブランキの革命思想とはいかなるものなのか。

---

<sup>164</sup> 同上、p.145-232『社会批判』(La Critique Sociale, 2 vols 1885 Paris.) ブランキが1872年までにまとめた文献を基に死後出版されたもの。

<sup>165</sup> 同上、p.147-151。

<sup>166</sup> 同上、p.151。

<sup>167</sup> 同上、p.201『財産の起源』。

<sup>168</sup> 同上、p.p.152。

<sup>169</sup> 高草木光一『オーギュスト・ブランキにおける革命の主体』三田学会雑誌、Vol177, No4(1984.10)、p.77-78参照。



### 第三節 ブランキの革命思想 — 「革命独裁」

ブランキの発する言葉のうちに、「反乱の理論家にして哲学者としての側面<sup>170</sup>」に加えて、1850年に書かれた以下の文に扇動者＝アジテータとしての一面を私たちは、識ることができる。

革命とは、壊乱した生体の諸要素が、新しい形態を再構成しようと努力して、騒乱にみちた結合を行うにも似た、社会体制における再編成の瞬間的作業を惹き起こすものである。この作業は老朽した集合体に息吹を吹き込んでもう一度活気づけるといった具合にはゆかないものである。

したがって、社会の再編成などという観念は、大騒乱が、ぼろぼろに朽ち果てた旧社会に死の宣告を下し、自由を奪われていた諸要素をすっかり解放しないかぎり実態を持たないものである。それら諸要素の自然発生的かつ急激な醗酵暴動こそ、新しい世界を組織すべきものである。

いかなる思考の諸能力も、いかなる知性の緊張も、与えられた瞬間にしか爆発しない。この創造の現象を予測することはできない。人は揺り籠を用意することはできるが、子供を即座に産むことはできない。

死と再生の瞬間にいたるまでは、未来社会の基礎となるべきもの、すなわち教義は、いぜんとして、漠然たる希求と、遠くかすんだ視界としての状態にとどまざるを得ない。それはあたかも、地平線にゆらめきうごく影の如く、その輪郭を人間の視力で捕らえることも、定めることもできないのに似ている。

だがしかしまた、そんな時代のうちにも、変革の時は到来する。そのときは、もはやいかに議論をつくそうとも、未来へ向って一步も進むことはできない。論議は、思考にとって超えがたき柵をのりこえようとしても、むなしく疲労するばかりである。その柵を、革命の腕のみが打ちくだくことができよう。それが未来という存在の神秘であり、その現在生きている者には見透すことのできないヴェールは、死の前でおのずから崩れおちるのである。

<sup>170</sup> S・モリニエ『コミュニオンの炬火』、栗田勇訳、現代思潮社、1963、p.40。

旧き社会を崩壊せしめるとき、その残骸の下から、新しきものが見出されるであろう。

つるはしの最後の一撃が、必ずや人々を勝利の日に導くであろう<sup>171</sup>。

このようにブランキは、革命のイメージを語り、国家は支配階級の憲兵であると規定するゆえに、初期社会主義者達が主張するような、社会構造のあれこれの改修で革命が成就することはなく、抑圧され続けてきた民衆の情念の一瞬の爆発こそが革命であると述べている。さらに、民衆が旧体制を徹底的に破壊した後に、未来社会のイメージは浮かび上がってくるのものであり、ユートピアはいま語るべきことではないと主張している。革命のみが、民衆の前に立ちはだかる壁を、未来へ向けて突破することができ、かつ革命とは予測不知、一瞬にして燃焼しつくす民衆蜂起であり、その瞬間から全ては始まり、人民は自らを解放することができる、ブランキは民衆にアジテートしている。<sup>172</sup>

中庸主義を否定し、対立する非妥協的階級関係を明らかにし、国家を支配階級の「憲兵」と規定するブランキは、権力奪取＝「政治変革」は手段であり「社会変革」こそが目的と述べ、「大衆の党派」と共和主義の宣伝の重要性を明言している。さらに、組織された暴力と民衆蜂起、人民総武装を謳う彼の思想は、一八三九年の蜂起の敗北<sup>173</sup>の総括によって磨き上げられ、二月革命における情勢分析、方針提起、および「冬のプラド」における演説に続く、民衆に対する一連の訴えのなかに帰結したと考えることができる。加えて、この言葉のうちから浮かび上がる、ブランキの哲学と詩をもって武装労働者の魂を揺さぶる、稀代の扇動者としての一面を私たちは評価することができる。

次は、「革命でさえ急激な様相を帯びはするものの、結局さなぎが殻を破るということにすぎない。革命はいま破られた殻のなかで、ゆっくりと時間をかけて大きくなってきたものなのだ。……<sup>174</sup>」と詩のように語る、一八六九年の一文である。ここにおい

<sup>171</sup> 同上、p.41-42 1850年に書かれた「ブランキの手記」とある。

<sup>172</sup> 長崎浩『結社と技術』、情況出版、1971、p.16参照。長崎浩は、ブランキの語る民衆蜂起について「蜂起の「自然発生性」とは、権力と秩序にたいして大衆蜂起がもつ無定形の暴力的破壊力のことをいっている。組織の有無にかかわらず発揮されるこの破壊力は、すでにブランキがはっきりと認めていたものである。」と記している。

<sup>173</sup> S・モリニエ『コミューンの炬火』、栗田勇訳、現代思潮社、1963、p.27-28 1839年5月12日、四季協会の武装蜂起。

<sup>174</sup> オーギュスト・ブランキ『革命論集』、加藤晴康訳、彩流社、1991、p.149『社会批判』「一高利」1869。

ても、革命とは民衆蜂起、すなわち抑圧された民衆の精神が殻の中で醗酵し、一挙的解放として表現された爆発の瞬間であると、彼は強調している。

ブランキは、思考の結果こうあるべきとして「様々な流派」の指導者たちが策定した来るべき社会を忌避し、何も変わらないと明言し、革命＝蜂起に続いてパリの市民がなすべきことを訴えている。

革命の翌日こそ芝居の山である。かといって、急激な変化が起るというわけではない。人や事物は昨日と同じである。ただ希望と恐怖とがそのところを変えるのである。鎖は断ち切られ、国民は自由になり、その前にはてしなき地平線が開ける。そうなったら何をなそう？<sup>175</sup>

と市民に呼びかけ、続いて政治権力奪取後の障害物の破壊を「即座に断行すべき措置」として「経済面、政治面、財政面、公教育、政府＝パリの独裁」をあげている。ブランキは、「共産主義を政令によって強制するなどというのはとんでもないことで、共産主義は国民の自由な決意による達成に待つべきである<sup>176</sup>」との主張から「経済面」の措置は、土地の強制収容および資本主義企業の公有化、つまり資本の没収を目的とせず、資本活動を抑制しブルジョアジーの行動を監視するものである。「政府＝パリの独裁」これがブランキの革命思想の特徴である。

一八四八年に一年間パリの独裁をしていれば、いま終わらんとしている四分の一世紀という貴重な時間を、フランスも歴史も節約しえただろうに。今度はたとえ一年ではなく十年の独裁が必要だとしても、決して躊躇すべきではない。パリの政府は結局国民による国民の政府であり、したがって唯一正統な政府である。パリは決してそれ自身の利害にのみ没頭する一自治都市ではなく、真の国民的代表なのである<sup>177</sup>。

「武装せる労働者で蔽われたフランス、これこそ社会主義の出現である」と「パリの独

<sup>175</sup> 同上、p.183 「共産主義－未来の社会」1869-1870年に執筆。

<sup>176</sup> 同上、p.187。

<sup>177</sup> 同上、p.187。

裁」をブランキはイメージしている。ブランキは、「フランスの頭脳であり心臓である」革命拠点パリの労働者に全幅の信頼をよせ、労働者の組織された暴力による長期にわたる「パリの独裁」は「地方に対するパリの優位との構図を含<sup>178</sup>」むものであり、「パリの独裁」こそが反革命の策動を圧倒するために必要なのだ、と主張している。

「革命的権力」から深化した「パリの独裁」、いわゆるブランキの革命独裁論は、人民総武装論とともに彼の思想の根幹を形成するものであり、元をたどると「革命的権力」との一文を、四季協会の「入会式宣誓<sup>179</sup>」に見い出すことができる。この「革命的権力」とは、王政を打倒し政治権力を奪取したのち共和制に移行するためには、社会状態が最悪の状況にあるので「しばらくの間は」、「人民がその権利を行使するようにさせる革命的権力」の必然性について述べたものである。そこに「革命的権力」の内容は具体的には示されていないが、いわゆる過渡期における、革命の主体である民衆が担う権力の在りようを述べていると理解できる。しかし彼は、民衆による階級独裁とは表現していない。ブランキは、共和政体を獲得するためには、民衆の階級意識つまり「判断力<sup>180</sup>」の醸成が不可欠の条件と考え、啓蒙の徹底と促進のために、独裁的な革命的権力の必要性を主張している。

一方、ブランキは、革命による政治権力奪取後、共産制にいたるまでの過渡期における政治形態として「パリの独裁」を、二月革命の敗北の総括から導き出した。彼は「パリの独裁」の目的は「武装せる労働者で蔽われたフランス」、いいかえると「組織された暴力」をもって反革命を阻止することにあると述べている。

ブランキは、民衆の圧倒的多数を覆う無知の闇を憂慮し「無知」が共産体制にいたる最大の障害物と明言している。「パリの独裁」期間は、「共産制は即成のきかぬ教育というものの結果である以上、それ自身即成することは不可能である<sup>181</sup>」ゆえに必要な期間であり、過渡期には共産主義を国家が法で強制すべきではない。共産体制は、教育によって醸成される「判断力」を有する市民、すなわち自立した市民の自由な決意による達成に待つべきであると述べている。今すべき「唯一の務めは、未来の組織づくりの仕

<sup>178</sup> 柴田三千雄『近代世界と民衆運動』、岩波書店、2001、p.328 ブランキの情勢判断は、「九三年憲法を制定しながらその実施を停止した共和第二年の故知にならい革命独裁論を提起した……この場合の独裁は、階級的と同時に、地方に対するパリ優位との構図を含んでいる」とある。

<sup>179</sup> オーギュスト・ブランキ『革命論集』、加藤晴康訳、彩流社、1991、p.72-74。

<sup>180</sup> 同上、p.167 人間の持つ才能のうちで最も有用な能力である「判断力」は全面的な教育により飛躍的な発展を遂げ、新しい社会の武器となると、「共産主義—未来の社会」でブランキは判断力の重要性を強調している。

<sup>181</sup> 同上、p.165。

事のための良き素材を用意しておくことだけなのだ<sup>182</sup>」とのとおり、「パリの独裁」期における最大の獲得目標を民衆の啓蒙においている。

ブランキは、「無知と猜疑心」が「藁屋根にとりついている」農村の状況<sup>183</sup>を、とりわけ危惧している。無知という最大の障害を乗り越えるために、「啓蒙の光」すなわち教育の全面的な普及の必要性を次のように述べている。

共産制はその同伴者であり道案内である教育と並行して一步一步進むものであり、この二者のどちらかが遅れたり先になったりすることは決してなく、横一列に並んでいくのだ。共産制は啓蒙の光があまねく行き渡り、一人として他人に騙されるような者のいなくなったとき初めて完成されたものとなろう<sup>184</sup>

と。さらに、啓蒙が行き渡った結果市民が獲得する「他人に騙されない」ための力についてブランキは、次のように表現している。

人間の持つ才能のうちで最も有用で、とりわけ防衛に役立つ能力、われわれを内からも外からも他人からも自己からも同時に守ってくれる能力、すなわち判断力は、現在はあまりにも希少な存在となっているが、これも全面的な教育により飛躍的な発展を遂げ新しい社会の武器となるであろう。経験と比較のもたらす果実から、判断力は未知の力を汲み出すであろう<sup>185</sup>。

教育の結果、「判断力」を持つ市民、すなわち、自らを抑圧から解放する主体であると認識した個人が生まれる。ブランキが、過渡期に民衆に求めたのはこのことであり、次の言葉で表現している。「共産主義は国民の自由な決意による達成に待つべきである。そしてこの解決こそ、知識の光があらゆる人間に行き渡った時に初めて得られるものである<sup>186</sup>」と。このようにブランキは、過渡期における革命政権の第一義的な任務を民衆の啓蒙期間と見ている。では、彼は民衆蜂起にいたる革命運動を先頭で担う者たち

---

<sup>182</sup> 同上、p.177

<sup>183</sup> 同上、p.186。

<sup>184</sup> 同上、p.166。

<sup>185</sup> 同上、p.167。

<sup>186</sup> 同上、p.187。

を、どのように捉えていたのか。

革命運動を先頭で担う者たちを、ブランキは「デクラセ(déclassés)=階級落伍者」という。1832年「十五人裁判の陳述<sup>187</sup>」でブランキは、「賤民の列に投げ込まれた心情と知性を持った人々」と、ブルジョア階級出身の自らの出自に重ね、知識人の革命運動における役割の重要性と、ブランキ自らの闘う決意を宣言している。また、1852年の「マイヤールへの手紙<sup>188</sup>」では、革命運動を闘う「プロレタリア陣営の主力とさえなっている」ブルジョアが果たしている、極めて大きな役割を認めている。では、この「デクラセ」は、「階級落伍者」つまりブルジョア階級からはみ出してプロレタリアの先頭に立って闘う知識人と解すべきなのか。

1869 - 1870年にブランキが執筆した『共産主義—未来の社会』において、「デクラセ=階級落伍者」概念を — 強調するためイタリック体で綴り<sup>189</sup> — 繰り返し展開している。以下、逐次考察する。

「階級落伍者に対する挑戦は、クーデター以後、非宗教的学校や教員に対する容赦なき排斥の一致した叫びとなっていたのである<sup>190</sup>。」ここでは、非宗教的学校の教員を「階級落伍者」といつている。次は、

パリにおける公開集会で、階級落伍者に対しクーデターによる誹謗の言葉があえて吐かれた。賢者の社会は生き延びることができないと、それよりはむしろ愚者の社会を選ぶべきであるとの言辭が、あえて弄された。国民が無知ゆえに奴隷の境遇にあるというのに、あまりにも教育のある人間が多すぎるなどと嘆くのは、まさに人民の敵の弄する言辭ではないか<sup>191</sup>。

この一文では、教育のある人間を「階級落伍者」といつている。次は、

いたるところの学校はジェズイットの僧院に取って代られ、先生たちはまるで鹿の

---

<sup>187</sup> 同上、p.31。

<sup>188</sup> 同上、p.107-124。

<sup>189</sup> 同上、p.6 凡例2 参照。「原文イタリックおよび太文字表記の箇所には原則として傍点を付した」とある。

<sup>190</sup> 同上、p.161-162

<sup>191</sup> 同上、p.192。

ように追い立てられ、階級落伍化する貧しい者の教育が呪われ、初等教育は教理問答に墮し、高等教育では哲学の廃棄と学問研究の分割、いやむしろ絞殺が行われている<sup>192</sup>。

ここでは、貧しい者が学校で教育を受けることを「階級落伍化」といつている。次は、

大衆の欲望に火を放ち、彼らをして社会へと向かわせる教育に対し、あらゆるところで呪いの言葉が放たれ、すべての社会秩序の敵、騒乱の扇動者たる階級落伍者に呪詛が雨霞と浴びせられた<sup>193</sup>

と、教育者と教育を受けた結果、知識を獲得した者を「階級落伍者」といつている。最後に以下を見てみよう。

今日再び、民衆集会のなかにおいてまで、階級落伍化に対する攻撃が行われ、無償義務教育に対する闘いが叫ばれるのを見る時、これが社会主義の偽仮面を被った聖職＝封建の陰謀であることを見抜くのはたやすいことである<sup>194</sup>。

以上のように、無償義務教育を「階級落伍化」といつている。『共産主義－未来の社会』から五箇所を引用した<sup>195</sup>。これらの箇所において、ブランキは無償義務教育を「階級落伍化」と述べ、非宗教的学校の教育者と教育を受けた結果知識を獲得した者を「階級落伍者」と表現している。

一方、ブランキは、同論文の結語で「階級落伍者」とは貧困の極みに沈潜している「思想を扱う労働者」、いいかえると「知識を持った非人」、「エリート」と規定し、「この階級落伍者たちこそ進歩のための見えざる武器であり、現在大衆をふくらませ、彼らが意気銷沈して衰弱して行くのを防いでいる秘密の酵母菌となっているのだ。彼らは明

---

<sup>192</sup> 同上、p.194。

<sup>193</sup> 同上、p.195。

<sup>194</sup> 同上、p.196。

<sup>195</sup> 同上、p.161-p.197 なお『共産主義－未来の社会』からデクラセ（階級落伍者）概念を詳細に分析する手法は、高草木光一の次の論文から着想を得た。「オーギュスト・ブランキにおける革命の主体」86頁 脚注(84)において、氏は闘う主体を「無知から離脱した労働者のみ」と結論付けている。一方、本修士論文では、「組織された暴力として闘う主体は、知的に覚醒した全てのプロレタリアートに加えて、ブルジョア階級から逸脱したプチ・ブルジョア知識人と教育者である。」と解している。

日の革命のための予備軍となるであろう」<sup>196</sup>と明言し、「エリート」である知識労働者を「階級落伍者」といつている。以上を考察すると、ブランキの「階級落伍者」という概念は、労働者の解放のために闘うブルジョア階級からはみ出した、いわゆるプチ・ブルジョア知識人と教育者を指すものであり、加えて、無知の闇に覆われたプロレタリア階級からはみ出した労働者。つまり、教育によって「判断力」を獲得した労働者と解することができる。さらに、彼は「デクラセ」と労働者の分岐点を、自らを資本の抑圧から解放する意識、つまり知的覚醒においている。

ブランキの革命論は、プロレタリアートを基盤とせず、秘密結社に依拠し、少数精鋭分子による一揆主義とエンゲルス等から批判されている。しかし、「パリの独裁」を担う主体を武装労働者に求めるブランキは、その主体を少数精鋭分子に見るのではなく、「無数の人民」に求めている。彼は「愛国者が支持すべき党派は、大衆の党派である<sup>197</sup>」といい、「無数の人民」とは、パリの労働者層をプロレタリアートの名でよびつつ「人民」＝「民衆」と捉えなおしたものである。ブランキは、革命の基盤をプロレタリアートにおき、「パリの独裁」の主体を、知的に覚醒したすべてのプロレタリアートに開かれたものとみている。

ブランキは、国家を「貧民に対する富者の憲兵」すなわち、支配階級が被支配者階級を抑圧するための道具、と規定している。ゆえに、既存の「国家機構を破壊し、富者に対する貧者の憲兵であるような別の国家機構をつくる」ことを主張している。このブランキの国家論に対して、ガローデイは、「科学的社会主義に対する、ブランキ最大の貢献である」と積極的な評価を下している<sup>198</sup>。しかし、ブランキの革命思想の特色は、階級の規定、加えて、支配階級と非支配階級間の非妥協的な対立構造を暴きだしたことにある。彼は、階級間の暴力的関係性を政治社会構造の分析の基底に置くことにより、上記の「国家論」を、さらに「革命独裁」論を構築した。

ブランキによれば、革命とは抑圧された民衆の情念が爆発する瞬間、換言すると、武装蜂起である。人民は、組織された暴力によって国家権力を奪取し既存国家機構を解体する。そして、共和制を経て共産制にいたる間の過渡期の政権は、「ブルジョア国民

<sup>196</sup> 同上、p.196-197『共産主義—未来の社会』の結語でブランキは「階級落伍者とは、知識を持った非人でなくして何であろうか？」と問うている。

<sup>197</sup> 同上、p.49。

<sup>198</sup> ガローデイ『近代フランス社会思想史』、平田清明訳、ミネルバ書房、昭和33年、p.408。



軍」を「全面的武装解除」する一方、「すべての労働者を武装させ、民兵に編成すること。」すなわち、人民総武装であり、「武装せる労働者で覆われたフランス」。これがブランキが主張する共産制にいたるまでの過渡期における政治形態としての「パリの独裁」つまり「革命独裁」論なのである。しかし、ブランキは、「パリの独裁」政権の樹立を当面の課題と設定し、過渡期における権力構造、社会機構を明示せず曖昧なままにしている。彼は、「共和制」から共産制への移行の問題を具体的には語っていない。

しかし、ここにブランキが、1852年にベル＝イール牢獄で唯一未来を語っている著明な一節がある。

秩序立った無権力状態こそ人類の未来である。

社会の究極目的である最高の統治形態、それは統治の不在である。その時には、市民一人一人はちょうど分け前きっかりの権力を所有し、支配の完全な均衡がすべての人間の間で成立する。ということは、誰一人支配する者がいなくなるということである。このような社会では、階級制というのは、単なる仕事の区分の適用にすぎなくなり、今日それを構成しているいかなる観念も示すことはない。それは、尊敬も、従属も、特別の考慮も、特別の給与も、物質的享樂も、自尊心の勝利も、権威も、影響力も、横柄さも、要するに現在の権力の構成要素は、何一つ含んでいない。……

だが、そのユートピアはいつ誕生するのか<sup>199</sup>？

夢を語らないブランキは、人類の未来を、秩序ある「無権力状態」、「統治の不在」、換言すると無政府状態と表現し、かつ「いつ？」と我々に問いかける。

---

<sup>199</sup> M・アバンスール『幽閉者の解放』、浜本正文訳、『天体による永遠』、雁思社、1985、p.171-172。  
ジェフロワ『幽閉者』のp.183にベル＝イール牢獄にて1852年に本手稿は書かれたとある。

### 第三章 天体による永遠

浜本正文は、読む者を戸惑わせ、かつ革命家ブランキのイメージと馴染まなかった『天体による永遠』を、ヴァルター・ベンヤミン(Walter Benjamin、1892-1940)と、ミゲル・アバンスール(Miguel Abensoul、1939-2017)の二人だけが、積極的に評価したと述べている<sup>200</sup>。ベンヤミンは、『天体による永遠』で展開するブランキの宇宙観を「地獄のヴィジョン」、「永劫回帰の理念<sup>201</sup>」を「希望のない諦観」<sup>202</sup>と表現し、この「神学的思弁」を社会に対する「無条件の屈服」と同時に「もっとも恐るべき抗議」<sup>203</sup>なのだと表している。

一方、アバンスールは『幽閉者の解放<sup>204</sup>』で、ブランキの一生は、唯一「あらゆる障壁の爆破」という意味しか持っていなかったと評し、テキストの根底にあらゆる政体を拒否する意志、「国家への憎悪」を見るべき<sup>205</sup>と述べている。さらに、「ただ一つの枝

<sup>200</sup> オーギュスト・ブランキ『天体による永遠』、浜本正文訳、雁思社、1985、p.235 訳者解説参照。

<sup>201</sup> ブランキが『天体による永遠』で展開する永劫回帰について、ベンヤミンは『天体による永遠』には『ツァラトウストラ』より10年早く、事物の永劫回帰の理念が提出されている。『ツァラトウストラ』より悲壮感はずかばかり少なく、非常に大きな幻覚誘導力をもっている、と述べている。(ベンヤミン『パサージュ論 I』p.55-56 結論) さらにベンヤミンは、「ボードレールのパリ」でボードレールの「永遠反復」について「ボードレールにあって星々は、商品の判じ絵となっている。それら星々は大規模な同一のものの永遠反復なのである。」(ベンヤミン『パサージュ論 II』p.263, j62.5) 「『天体による永遠』の中の「それはいつも古い新しさであり、いつも新しい古さである」という表現は、ボードレールが記録したような憂鬱の経験にぴったり一致する。」(ベンヤミン『パサージュ論 II』p.314 j76.2)と述べ、19世紀後半、フランスとドイツでほぼ同時期に起こったボードレール、ブランキ、ニーチェの「永劫回帰の理念」に言及している。

道旗は、ベンヤミンを語る上でブランキに一節を割いている。そこで「一九世紀半ば、ヨーロッパ近代の本格的な開始期に。ほとんど時を同じくして三つの永劫回帰の観念が姿を現わした。哲学の領域におけるニーチェ、革命的実践の場におけるブランキ、そして文学の領域におけるボードレールである。自身、これら哲学、革命、文学の領域に深く分け入っていたベンヤミンは、偶然とは言えないこの符号に注目し、永劫回帰の観念そのものを一九世紀近代という歴史的布置にとっての決定的要素として問題視しようとした。」と指摘している。(道旗泰三「万華鏡の破碎のあとに—ベンヤミンにおける永劫回帰と弁証法イメージ」、ドイツ文学研究(1994),39:131-187、1994、p.131-137 (1) ブランキ、もしくはパリケード参照。)

<sup>202</sup> ヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論 I』、今村仁司、三島憲一訳、岩波書店、1993、p.55-57、ベンヤミンは「進歩がない...永遠は、無限に同じ芝居の上演を恒常不変に行うのである」というブランキの思考を、希望のない諦観と述べている。

<sup>203</sup> ヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論V』、今村仁司、三島憲一訳、岩波書店、1995、p.29、ベンヤミンは、ブランキの最後のこのテキストは宇宙論的思弁であり、地獄が神学の対象なら神学的思弁といえる、と述べている(1938)。

<sup>204</sup> 岩波書店版『天体による永遠』訳者解説付録(p.199)参照、「幽閉者の解放」はアバンスールが共同で編纂した『武装蜂起教範、天体による永遠、その他のテキスト』の「あとがき」として付した長文の解説とある。雁思社版『天体による永遠』(p.155-219)にアバンスールの「幽閉者の解放」が掲載されている。そこでアバンスールは、ブランキの一神教形式の宗教を攻撃する点を展開している。ブランキは「肝心なことは、ユダヤ = キリスト教の伝統を根絶し、その廃墟の上に新たな開花を促すことなのだ」と考え、「一体どのようにして、現在のユダヤ = キリスト教時代から脱出できるのか?— 彼はすべての価値の価値転換を目指したのである。唯物論と無神論、創造以前以前から存在する永遠で無限の宇宙、すなわち、自己固有のエネルギーで生き続ける宇宙の — 積極的な意味での — 了解、あらゆる超感覚的な背後世界の拒否、— そういったものが、世界への新たな突破口を求める彼の価値転換の課題であった。」と分析している。

<sup>205</sup> ミゲル・アバンスール「幽閉者の解放」、p.167-168、これは『天体による永遠』所収 p.157-219、浜本正文訳、雁思社、1985。

分かれの章だけが、希望に向かって開かれている」とブランキが記すのは、ブランキの権力に対する徹底したペシミズムによるものである<sup>206</sup>と述べている。さらに、ブランキ自身、「この天体による人類の永遠はメランコリックなのである<sup>207</sup>」と語っている。

ブランキが自ら「メランコリック」と情景を語り、またベンヤミンが「希望のない諦観」と、アバンスールが「権力に対するペシミズム」と、このテキストからブランキの心情を読み取るごとく、蜂起失敗の再演、裏切りの連続、幽閉の反復<sup>208</sup>と、彼を取り巻く状況は悲劇的であった。しかし、ブランキは、一秒ごとにおとずれる「分岐点」の先に、唯一未来を観る。その未来、すなわち「秩序立った無権力状態」を我々が獲得する最後の勝利の日までは、敗北の連続を、民衆が甘受せざるを得ないことを熟知するゆえに、ブランキは、「枝分かれの章」にすべてを賭けることができた。換言すると、ブランキは極めて悲観的な政治情勢分析を行う一方、終生、ブランキの心象は楽観主義に満たされていた。であるから、ブランキは、蜂起にすべてを賭けるために33年余にわたる幽閉の反復に耐えることができた。

かかる、ブランキの心情は、いかなる経緯をもって形成されたのかを、本章において『天体による永遠』の主題、我々の知性を呪縛する「世界の永遠」および「永劫の生々流転」と「永遠に不滅な物質」をキーワードとして論じる。

## 第一節 星雲の起源と彗星

「脱走をはかった時は発砲せよ。誘拐をくわだてる者があれば、ただちに囚人を銃殺し、侵入者には死体しか渡すな<sup>209</sup>」。かかる過酷なトーロー要塞の幽閉下<sup>210</sup>において、ブランキが、執筆した『天体による永遠』を貫く主題は、「世界の永遠という」我々の知性を呪縛する「観念」である。「永劫の生成流転を繰り返すとしても」物質は永遠で

<sup>206</sup> 同上、p.212 ペシミズムについては、ジェフロア『幽閉者』p.45-46参照、1830年七月革命の敗北は、ブランキの思想形成に大きな影響をもたらした「信念の流れと並行して、否定と不信の流れが形づくられたのである。果敢な人間の一群さえあれば、状況を支配し社会の状態を変えられる……と同時に、今日は昨日と同じだし、明日もまた今日と同じだろうということを怒りとペシミズムをもってうべなわざるをえなかった。……前進と後退からなる永遠の進化の中で、人類の希望の不断の再生のリズムの中で、彼はその意に反して一つの役を演じたのである。」

<sup>207</sup> オーギュスト・ブランキ『天体による永遠』、浜本正文訳、岩波書店、2012、p.135。

<sup>208</sup> オーギュスト・ブランキ『天体による永遠』、浜本正文訳、雁思社、1985、p.206参照、歴史を無限の空間に移し替えることで、ブランキは反復の悪夢から脱出を敢行する。

<sup>209</sup> ジェフロア『幽閉者』、野沢協・加藤節子訳、現代思潮社、1973、p.316。

<sup>210</sup> 同上、p.324-334 トーロー要塞の描写とブランキが置かれた状況を詳細に記述している。

不滅であり<sup>211</sup>、とりわけ、有限の元素が無限の宇宙を満たすためには、永遠の反復に収斂せざるを得ないという「永劫回帰」<sup>212</sup>の理念であり、さらに、進歩史観、および西欧中心史観<sup>213</sup>の批判である。

このテキストにおいて、ラプラスの宇宙論を概ね肯定し<sup>214</sup>つつも、「星雲の起源と高温の問題、そして彗星」については疑念を呈し、ブランキは自説を展開している。ラプラスは、彗星と星雲の相違点を「太陽光を受けて見え始める彗星の移動」に還元し、彗星を「宇宙に広がる星雲状物質」すなわち「さまよえる小星雲」と主張している<sup>215</sup>。この理論の欠陥は、「凍てついた空虚な微光と、やがて太陽になる熱い蒸気のとてつもなく大きい集合体とを同一視」している<sup>216</sup>ことであると、ブランキは批判する一方、彼は「彗星はエーテルでも、気体でも、液体でも、個体でもない。天体を構成しているどんなものとも似ていない。それは定義不可能な物質であり、概知の物質のいかなる特性も有していないように見え<sup>217</sup>」、彗星は人類を絶望させるような謎に満ち、説明不能であり、かつ「宇宙の認識の克服しがたい障害となっている」<sup>218</sup>と主張している。

彗星は、膨張と収縮の両極を往来する千夜一夜物語の巨人にも似た<sup>219</sup>「我らが大気圏の柵につながれ、空しく自由もしくは歓待を求め続けている、哀れな囚人たち」、彼ら「青白きボヘミアンたち……は定住者の国へのぶしつけな訪問のために、かくも手厳しい償いをさせられているのだ」<sup>220</sup>と、ブランキは、自らの思想や活動方針が労働者ミリタンや民衆に広く受け入れられがたい状況、および、自らの幽閉と蜂起と敗北の反復を、安定と動乱の間を彷徨うボヘミアン、周回軌道を永遠に彷徨う人智では理解不能な彗星にたとえて、心情を吐露している。

ラプラスは、星雲の起源は「星雲状物質、すなわち気化した宇宙の雲の凝集体であ

<sup>211</sup> オーギュスト・ブランキ『天体による永遠』、浜本正文訳、岩波書店、2012、p.9-10。

<sup>212</sup> 同上、p.94 で「反復の無限」を p.131に「自然はこのオリジナルなまたは原型の化合物の一つ一つを無限に反復しななければならない」と永遠の反復を展開している。

<sup>213</sup> 神山四郎『史学概論』、慶應義塾大学出版会、2011、p.30-59 参照「歴史観の構造」で歴史観をキリスト教史観、進歩史観、ヨーロッパ中心史観などに分類し説明している。

<sup>214</sup> オーギュスト・ブランキ『天体による永遠』、浜本正文訳、岩波書店、2012、p.48 ラプラスの理論は、惑星運動のメカニズムに関する唯一の理論的、合理的証明であると述べている。

<sup>215</sup> 同上、p.43。

<sup>216</sup> 同上、p.44。

<sup>217</sup> 同上、p.46。

<sup>218</sup> 同上、p.54。

<sup>219</sup> 同上、p.47。

<sup>220</sup> 同上、p.40。

り、その凝集は宇宙の中で絶え間なく行われている」と説明するが、彼は星雲状物質の起源について曖昧なままに放置している<sup>221</sup>のだと、ブランキは批判している。一方、ブランキは星雲の起源を、宇宙の調和を破る燃え尽きた「星たちの巨大な渦巻き」が、別のそれたちと、双方の境界線上で衝突する「偶発事」と考え、その偶然の激突が「物質の初期の高温」を生み出す<sup>222</sup>。それは「猛り狂った乱闘」が突然始まり「恒星や惑星を瞬時に蒸発させてしまう猛火の稲妻が、絶え間なく切り裂いて走る、炎の海と化す」<sup>223</sup>と描写し、ブランキはトーロー要塞の土牢で、民衆がその手に一時勝利をつかんだ七月革命、二月革命、動乱の六月、そしてパリコミューンの蜂起した民衆街のバリケードに上がる炎の中に無数の人民と、殉教者の血で赤く染まった赤旗を観ていた<sup>224</sup>。

## 第二節 永劫回帰と相互依存 – 直線行程の歴史観とキリスト教批判

永遠の宇宙にあって、万物を分かつものにより、万物は支え合い、相互に結び付けられている<sup>225</sup>。永遠の宇宙には、有限の100元素が存在し、それは無数の物質を生成することができる。しかし、元素数は有限という制約を受け、産み出される物質数は無数といえど有限であり、宇宙の無限を満たすことはできない。唯一可能なのは、原型の「無限の繰り返し」、すなわち反復だ<sup>226</sup>とブランキは思考する。さらに、自らが特別な原型としての意味を持つためには、無限に反復されなければならない、オリジナルな地球の反復体である瓜二つの地球にあって何十億のコピーが存在する<sup>227</sup>。その結果、個々の人間は無限の反復によって分身として無限に生きてきたし、今も生きているし、生き続けるであろう。生涯の一瞬ごとの個々が存在する<sup>228</sup>と主張している。

ブランキは、このテキストの冒頭で、「永遠の宇宙にあって、万物を分かつものによ

---

<sup>221</sup> 同上、p.65。

<sup>222</sup> 同上、p.71-72。

<sup>223</sup> 同上、p.60。

<sup>224</sup> オーギュスト・ブランキ『革命論集』、加藤晴康訳、彩流社、1991、p.79-89「二月二十五日の演説」と「赤旗のために」参照。

<sup>225</sup> オーギュスト・ブランキ『天体による永遠』、浜本正文訳、岩波書店、2012、p.7 参照。

<sup>226</sup> 同上、p.82-84とp.131 ここでブランキは、宇宙の無限と100元素で構成される有限数の物質とオリジナルな化合物の無限の反復について述べている。

<sup>227</sup> 同上、p.101-102。

<sup>228</sup> 同上、p.124。

り、万物は支え合い、相互に結び付けられている<sup>229</sup>」と万物の相互関係性を語り、被造界が神の永遠の主宰下にあるとするキリスト教<sup>230</sup>を批判している。さらに、永劫回帰を主張し、始まりがあって終わりがある直線行程の歴史観<sup>231</sup>を全否定している。無限の反復に、進歩という理念は存在しない。昨日よりは今日、今日よりは明日の進歩を願う進歩史観をブランキは忌避している。ブランキは、自らが実践してきた革命運動を、原型＝オリジナルと表現し、敗北の反復に抗し、蜂起の無限の繰り返しから民衆は、強大な抑圧体制を突破する分岐点をこじ開けることができ、もって我々の子孫だけが、未来を獲得できるのだと主張している。だから、人民はロードス島に限らず、どこでもいつでも跳ぶことができ、自らを組織された暴力へと鍛え上げ、民衆街の蜂起に自らのすべてを賭けることができるのだ。

### 第三節 世界の永遠

ブランキを目撃したトクヴィル(Alexis de Tocqueville、1805-1859)は、議場でのブランキの姿を、やせこけた頬をし口唇は白く、またけがらわしく、下水道で生活していたのが、そこからはい出てきたかのようにだったと酷評している<sup>232</sup>。一方、デルヴォー(Alfred Delvau、1825-1867)が「火の下の氷<sup>233</sup>」と描く、武装労働者に対するブランキのアジテーションには、氷のごとく冷徹な精神と、燃え上がる情念が共存している。その根底には楽観的な心象が常に存在していた。であるから「永遠は無限の中で、同じドラマを平然と演じ続ける<sup>234</sup>」と、ブランキが吐露する常人では圧倒されてしまうごとく、

<sup>229</sup> オーギュスト・ブランキ『天体による永遠』、浜本正文訳、岩波書店、2012、p.7。

<sup>230</sup> 神山四郎『歴史哲学』、慶應義塾大学出版、2009、「キリスト教の救済史観」p.59-60「救済史観の近代の変容」p.64-68 参照「神が創造した世界の歴史は、過去、現在、未来の区分のない、イエスの贖罪の内に最終目標に向かって進む一回限りの直線行程にあるという考え方。」

<sup>231</sup> 同上参照、ここで、キリスト教の救済史観を論じている。ギリシャの無限回帰説に対して、キリスト教は時間の始まりと終わりをイエスの贖罪のうちに説いている。「世界は永遠ではなく、神が無から創造したものである。そしてそれと一っしょに神は時間もつくった。だから世界は一度きりの始めと終わりをもつ有限なものである」という「歴史の過程を時間で刻む考え方。」

<sup>232</sup> アレクシス・ド・トクヴィル『フランス二月革命の日々』、喜安朗訳、岩波書店、1988、p.210 一八四八年五月十五日の議会でトクヴィルはブランキを目撃して描写している。

<sup>233</sup> ジェフロア『幽閉者』、野沢協・加藤節子訳、現代思潮社、1973、p.114 一八四八年二月革命下、中央共和協会におけるブランキをアルフレッド・デルヴォーは、「演説家としての彼の影響力は絶大だった。彼のかんだかくて鋭い、口笛を吹くように金属的な声、しかも太鼓の音のようにこもった声は、聴衆に熱気を伝染させた。」「ブランキの雄弁と性格は灰の下の火ではなく、逆に火の下の氷だった」と評している。引用は彼が一八五〇年に出版した『二月革命史』から、と括弧内に記されている。

<sup>234</sup> オーギュスト・ブランキ『天体による永遠』、浜本正文訳、岩波書店、2012、p.136 テキストの結語「宇宙は限りなく繰り返され、その場その場で足踏みをしている。永遠は無限の中で、同じドラマを平然と演じ続けるのである。」

その時々体制による幽閉の反復に耐え、民衆の情念が爆発する瞬間としての、一挙的武装蜂起に向けて「枝分かれの章」を、自ら掴み取ろうとする意思の持続ができたのだ。

このテキストで、永遠の反復をブランキは繰り返し語っている。無限の反復の結果、全人類はその生涯の一瞬ごとに永遠である。だから「トーロー要塞の土牢の中で今私が書いていることを、同じテーブルに向かい、同じペンを持ち、同じ服を着て、今と全く同じ状況の中で、かつて私は書いたのであり、未来永劫に書くであろう<sup>235</sup>。」この単調な永遠の繰り返しには、進歩がない<sup>236</sup>。永劫回帰のなかで、我々は同一点から出発しながら、無数の分岐点に立ち、そのつど自らの「枝分かれの章」を選択し、個々の生に行き着くのだ<sup>237</sup>。この「枝分かれの章だけが、希望に向かって開かれている。」「進歩は、この地球上では、我々の子孫たちにしか残されていない<sup>238</sup>」と。

ブランキの思考のなかの革命には、上からの、あるいは下からの革命といった類型的区分はない。革命は、永遠の破壊と永遠の再生が、無限に繰り返される永遠の劇場で上演される、偶発事としてしか理解できない予測不可能な「自然発生的かつ急激な発酵暴動」であり、世界の調和を突破する突然の蜂起なのだ。その端緒は、常に民衆の目前に存在している「希望に向かって開かれている」分岐点 - 「枝分かれの章」 - なのだ。換言すると、直面する不正を突破する道を突き進もうとする意思が、常に民衆に求められているのだ。

ブランキは『天体による永遠』の最終節<sup>239</sup>において、世界の永遠という我々の知性を呪縛する謎から、三つの主題、永劫回帰、反進歩史観、反西欧中心史観を解き明かしている。

第一点は「我々が進歩と呼ぶものはそれぞれの地球上に閉じ込められ、それらの地球と共に滅ぶ運命にある<sup>240</sup>。」「今日まで、過去は我々にとって野蛮の象徴であり、未来は進歩と科学と幸福を意味していた。だが、幻影にすぎない<sup>241</sup>！」と主張し、過去から

---

<sup>235</sup> 同上、p.132。

<sup>236</sup> 同上、p.133。

<sup>237</sup> 同上、p.114。

<sup>238</sup> 同上、p.133。

<sup>239</sup> 同上、p.136 結語を参照、ここで、ブランキは反進歩史観・永劫回帰・反西欧中心史観を主張している。

<sup>240</sup> 同上。

<sup>241</sup> 同上、p.135。

未来へと向かう時間の流れの中で、未開の過去、幸福な未来という進歩史観を否定している。

第二点は「いつもそしていたる所で、地球という野営地では同じドラマが、同じ舞台装置のまま、同じ狭苦しい舞台の上で演じられているのだ<sup>242</sup>」、「宇宙全体が、常時更新され常時同一性を保つ物質や人間の、終りのない、永遠の再生産の場となる<sup>243</sup>」と、時間と空間における永遠の反復、永劫回帰理念を展開している。

第三点の西欧中心史観批判は、「自己の偉大さに酔い痴れ、自己を宇宙だと信じ、自己の牢獄の中であたかも無限の空間にいるかのごとく振舞って生きている騒々しい人間たち<sup>244</sup>」と述べ、さらに『社会批判』において、「オーストラリア人」は、「白色人種のうちで最も自分勝手に野卑で偽善的な変種に不幸にも遭遇した。自分たちの前に現れその侵略の邪魔をするすべてのものを、何の苛責もなく冷酷に滅亡させるアングロ・サクソンである<sup>245</sup>」と論難している。

ブランキは、『天体による永遠』において、キリスト教の「直線行程の体系」－始まりがあって終局の目標に向かって一直線に進む一回限りの時間－に対して、永劫回帰の理念－時間と空間における永遠の反復－を対置し、キリスト教の信仰命題を批判し<sup>246</sup>つつ、自己の心情を紡いでいる。

就中、このテキストでブランキは、「世界の調和を突破する突然の蜂起」＝「希望に向かって開かれている」分岐点を主張している。彼はこの主張で、民衆に求められているのは、直面する不正を突破する道を突き進もうとする意思であること。つまり、民衆が目前に存在している不平等や不正義等のあらゆる抑圧に抗して、彼らの意思を直接行

<sup>242</sup> 同上、p.136 結語を参照。

<sup>243</sup> 同上、p.108。

<sup>244</sup> 同上、p.136 結語を参照。

<sup>245</sup> オーギュスト・ブランキ『革命論集』、加藤晴康訳、彩流社、1991、p.223-225 「原始共産主義」1869年を参照、ここで、ブランキはオーストラリア大陸の先住民を「オーストラリア人」と表現している。

<sup>246</sup> 鈴木雅雄「星々は夢を見ないーオーギュスト・ブランキに関する覚書」、早稲田大学大学院文学研究科紀要 第2分冊 53、p.3-16、2007年、p.14-15参照。一八六五年五月、当時週二回発行されていたブランキ派の機関紙『カンディード』のほぼ毎号に、シュザメル筆名で掲載された一連の宗教批判文書は、ブランキがキリスト教的宇宙観の何をもっとも忌嫌っていたかを端的に示している。とりわけ六号、七号、八号に連載された「グラトリー神父。科学と信仰」は示唆的である。」ブランキは、「グラトリーによる科学と宗教の調停が、天体の運行に目的地を与えなおそうとするものだからである。「いかなるものも、ただ動くために動くのではなく、どこかに到着するために動くのである」という聖トマス言葉を引きながら、グラトリーはだから天体の運行にも目的があり、したがって私たちの世界には終わりががあると主張するわけだが、これが無限と偶然とを前提とする『天体による永遠』の議論と真っ向から対立することはいうまでもない。」しかも「グラトリーの試みがいわゆる宗教以上にたちが悪いのは、それが「不条理」でも「理解不能」でもない視線によって宇宙を捉えることは可能であるという幻想を抱かせてしまうからであり、つまりはこの世界に意味／方向性があると思わせてしまうからだ。」と鈴木雅雄は『天体による永遠』における、ブランキのキリスト教批判を分析している。



動として民衆自身が体現すべきこと<sup>247</sup>を、ブランキは民衆に訴えている。

さて私たちは、次の第四章において、マルクスの思想もまた啓蒙時代以降全面開花した西欧近代思想の一つにすぎず、キリスト教救済史観の様々な世俗的変容の一形態であることを解き明かす。

特に「唯物史観の選ばれた民」が組織する革命党 – いわゆるマルクス・レーニン主義に立脚する – の党組織論に、宗教を信じる者のもつ強い精神主義が含まれているのは、マルクスの思想もまた西欧キリスト教的世界に育った歴史哲学をもっているからであることを明らかにする。

---

<sup>247</sup> オーギュスト・ブランキ『天体による永遠』、浜本正文訳、雁思社、1985年、p.1-7「序 天文学と革命」参照 河野健二は、『天体による永遠』の序において「ブランキにとって効果やプログラムは問題でない。……ブランキの課題は、この権力が作る一切の障害物を爆破し、政治そのものを絶えず告発することであった。革命はそのためのチャンスであり、だからこそかれは絶えずそのチャンスに賭けたのである。社会の反復性と持続性、そういった地平から思い切って脱走し、価値の限界を突破する一瞬に賭けること、これこそブランキが生涯に亘って試みたことである。社会へのこうしたブランキ的な見方は、短い生命しか持たない人間を載せている地球、地球をとり巻く無数の天体について、ブランキが本書で対置した見方とつり合っている。」と述べている。

## 第四章 キリスト教救済史観の近代の変容

母国フランスにおいてブランキは、サン＝シモン、フーリエやプルードンと並ぶ19世紀の思想家として高く評価されていて、1881年1月5日、彼の葬儀に際しては、イタリア大通りからバスチユ広場を通り抜け、ペールラシューズ墓地まで柩車の後を十万人の葬列が続いた<sup>248</sup>、といわれている。しかし、我が国のブランキ思想研究者達は、マルクスの思想を基準点として、マルクス主義との詳細な対比、あるいは初期マルクスの思想の中に、ブランキの革命思想の影をいかに読み取るのかに傾注している。また、第二次世界大戦後、マルクス主義的立場からガローディ<sup>249</sup>(Roger Garaudy、1913-2012)は、自著『近代フランス社会思想史』(*Les sources françaises du socialisme scientifique*,1949)でブランキの国家論を評価しつつも、イギリスと比較して遅れていたフランスの資本主義の発展段階に還元して、ブランキの思想を分析の俎上に乗せてきた。

かかる先行研究を踏まえ、私たちは本章において、K・レーヴィット(Karl Löwith、1871-1973)が『世界史と救済史』(*Weltgeschichte und Heilsgeschehen*,1953)等において、論じている「近代の歴史哲学は、〔神の約束の〕成就を信ずる聖書の信仰に端を発したものであり、結局においてそれは、それ自身の終末論的な世俗化にゆきつくということを示す<sup>250</sup>」のであるという視点に立脚し、ブランキの革命思想の根底における歴史観＝永劫回帰理念が、キリスト教救済史観の近代の変容の一つであるマルクスの思想とはその根本で相違していることを明らかにする。

### 第一節 キリスト教の歴史観

キリスト教と教会を論難するブランキが、その生を疾走した19世紀におけるフランスの民衆間で、キリスト教は「市民生活の隅々にまで浸透していて、小市民層のあいだで

---

<sup>248</sup> ジェフロア『幽閉者』、野沢協、加藤節子訳、現代思潮社、1973、p.368。

<sup>249</sup> 「フランスのマルクス主義哲学者。1933年フランス共産党入党。1968年「プラハの春」の評価めぐり党中央と対立し共産党を除名された。以後イスラム教に改宗した。パレスチナ問題に関連して反イスラエルの立場から発言し、特に1998年に公刊した書物で「ナチスのユダヤ人ジェノサイド」が極右シオニストらによる政治的誇張である旨の主張をした。」、ガロディ、日本大百科全書、<https://kotobank.jp>、2019年8月4日閲覧。

<sup>250</sup> レーヴィット『世界史と救済史』、信太正三、長井和雄、山本新訳、神奈川大学人文学会、1964、p.8、カギ括弧は原文のまま。

はフリー・メイソンなどの秘密結社や互助組織が生きており」、農民たちは「千年王国説」やマニ教の説く「善悪二元説」に影響を受けていた<sup>251</sup>。

「世界は永遠ではなく、神が無から創造したものである。そしてそれといっしょに神は時間もつくった。だから世界は一度きりの始めと終わりをもつ有限なものである。」という、一回限りの時間の観念は、キリスト教の信仰命題である。「これによって後戻りすることのできない、シュレーゲルが「直線行程の体系」といつた歴史観ができあがった。」<sup>252</sup>

ゴロー・マンは、「歴史哲学の根本問題」において「時間のなかの生成変化の概念、連続および連続のなかの一回性の概念は、ユダヤ・キリスト教によって西欧世界にもたらされた。西暦という年代計算は、キリストという絶対存在者によって時間に一つの意味、一つの秩序が与えられ、キリスト教によって歴史と歴史記述が、いまわれわれのいう意味で普遍史、世界史、人類の歴史を刻むことが可能となった<sup>253</sup>。」と述べ、キリストの誕生を起点にしてA.D.とB.C.<sup>254</sup>に分け一年ずつ加算していくという、歴史の過程を時間で刻む考えを、キリスト教が西欧世界に植え付けたことを明らかにしている。

また、リッカート(Rickert, 1863-1936)は、『歴史哲学序説』において、進歩・退歩とは「価値概念」であって価値上昇・価値低下の概念であり、人が「価値尺度」を有しているときにのみ、進歩について語りうる<sup>255</sup>、と述べている。さらに、キリスト教をつうじてはじめて、「世界史」という観念が、語の厳密な意味で可能となった。神は世界と人間を創造し、人間は一組の夫婦から生まれた。このように、世界史はある一定の時点ではじまり、それは世界の審判でおわりをつける。「墮罪と贖罪とは、経過の諸時期を編成して、ある発展階程の系列を生じさせるものである<sup>256</sup>。」と述べている。

キリスト教の歴史観の大要は、神のみが永遠の存在である故に、神には歴史がない。

251 河野健二編『資料フランス初期社会主義』、平凡社、1979、p.443。

252 神山四郎『歴史哲学』、慶應義塾大学出版会、2009、p.59参照、歴史の過程を時間で刻む思考、キリスト教の創造と救済の過程に沿って人類史全体の道程を定めるといった、形而上学的な構想(同p.64)としての直線行程の歴史観。

253 ゴロー・マン『歴史哲学の根本問題』、ライニッシュ編『歴史とは何か - 歴史の意味』所収、田中元訳、理想社、1967、p.21-23。

254 A.D.はanno Dominiラテン語で「主の年において」の意、西暦紀元。B.C.はbefore Christ、西暦紀元前、大辞林。

255 リッカート『歴史哲学序説』、佐伯守訳、ミネルバ書房、1976、p.151-157、「IV 歴史における進歩」参照、リッカートは、前もってある価値尺度にもとづいて、一定の形態を価値にみちたものとして措定しておいたときのみ、人びとは、その形態にいたる発展を進歩とよぶことができる、といっている。

256 同上、p.192。

神が創造したこの世は、アダムとイブに始まり、最後の審判をもって終わる一回限りのもので、終末へと向かう後戻りのできない、神が創造した時間の流れの中で、歴史は作られる。楽園に生まれた人類は、自らの意志で原罪を犯した結果、楽園を追放されたが、キリストの贖罪によって再び楽園をとり戻す救いの機会が与えられた。そこで、再び自らの意志でその恩寵にあずかり、救いの目的に向かって中間時を、永い苦しい巡礼の旅を続ける<sup>257</sup>、というものである。つまり、歴史は、過去、現在、未来の区別のない永遠の神の主宰下にある一回限りのことで、終局目的に向かう直線的進行であること。人間の意志<sup>258</sup>が歴史を作ることに歴史観の特色がある。特に、キリストの贖罪によって再び楽園を回復するという行程を経るゆえに、歴史のなかで最後の審判を待つ「未来主義」のかたちが形成される。さらにルネサンス以降、キリスト教が世俗化するにつれて信仰色が希薄化し、楽天的未来主義色が濃くなっていった。<sup>259</sup>

## 第二節 アウグスティヌスの歴史神学

レーヴィットは、『世界史と救済史』において、キリスト教の救済史観が世俗化し近代的に変容を遂げ、「旧約の預言者からキリスト教時代を経て近代の世俗的ユートピアニズムに至る思想史」を、「ブルクハルト、マルクス、ヘーゲル、プルードン、コント、コンドルセー、ヴォルテール、ヴィコ、ボッシュエ、ヨアヒム、アウグスティヌス、聖書」と時代を遡及しながら展開している。換言すると、ヨーロッパ近代思想史には、観念論と唯物論双方に人類の進歩と歴史の終わりに理想王国が到来するという救済史の変容が含まれているということを論じているのである。<sup>260</sup>

さて、レーヴィットは『世界史と救済史』でアウグスティヌスの『神の国』(*De Civitate Dei contra Paganos*)は、世界の出来事におけるキリスト教の教義学的解釈－歴史

<sup>257</sup> 神山四郎『史学概論』、慶應義塾大学出版会、2011、p.45を要約。

<sup>258</sup> 同上。人間は自らの意志で神の意志に反することができる、神の意に反しアダムに知恵の実＝林檎を食べさせたイブの行為＝原罪である。

<sup>259</sup> 神山四郎『比較文明と歴史哲学』、刀水書房、1995年、p.104-105。

楽天的未来主義の一例にカントの歴史哲学をあげる。それは「人類の歴史は、全体としてみれば、自然が人類のうちに賦与しておいた全素質を完全に展開させることができるような唯一の状態として、内的にも完全でありまたその目的のために外的にも完全であるような国家体制をつくりあげる目的をもっているかくれた自然の計画の遂行と見なすことができる」という構想である。(カント『世界市民的見地における普遍史の理念』、福田喜一郎訳、『カント全集 14』所収、岩波書店、2000年、第八命題、p.16参照。)

<sup>260</sup> 同上、p.138-140。「プルードンは原文のママ」、『世界史と救済史』では「プルドン」と表記している。

神学 - であり、キリスト教的と呼ばれうるあらゆる歴史把握の典型である<sup>261</sup>、と述べている。「キリスト教の歴史解釈は、未来をある一定の目標と究極的な成就の時間的地平と考へ、未来へ目をむける<sup>262</sup>。」歴史においての問題点は、終末論的な未来において、救済されるか、あるいは永遠の罰をうけるかという最終目標、「最後の審判と復活」である。これは、人類史の最初の出発点である「創造と墮罪」と対をなしている。「この二つの超歴史的な、最初の出来事と最後の出来事に関連させれば、歴史それ自体は、救済の出来事の最初の啓示とその未来の達成とのあいだにある中間時なのである。」<sup>263</sup>この中間時にあって、「この世では、地上の国はカインの兄弟殺しにはじまり、神の国はアベルとともに始まる。カインは、〈この世の住民〉であり、その罪によってこの世の国の創設者となっている。アベルは、この世において、超現世的な目標を求めて〈巡礼〉Peregrinansの旅をつづける巡礼なのである<sup>264</sup>。」つまり、アウグスティヌスにおいて進歩とは、究極目標に向かう巡礼であり、「歴史の全過程は、歴史的な時間の彼岸に起こる神の国の、罪ある人間の国に対する最後の勝利を期待することによってだけ進歩し、意味をもち、理解しうるものとなる<sup>265</sup>」のである。

このように、レーヴィットは、アウグスティヌスの『神の国』を、「地上の国」の歴史と「神の国」の歴史という二つの対立する「世界の出来事」におけるキリスト教の教義学的解釈、つまり歴史神学と説明し、この歴史神学が、18世紀以降の近代歴史哲学の土台となっていると主張している。

一方、コミュニズムとファシズムの全体論的な歴史の必然論を嫌悪する、イギリスの哲学者R・ポパー<sup>266</sup>は、『知による自己解放』において、アウグスティヌスは、ペルシャ - マニ教的異端の「善き原理と悪しき原理」間における闘争の教義の影響下に、「人類の歴史を、善き原理すなわち神の国 *civitas dei* と悪しき原理すなわち悪魔の国 *civitas diaboli* の間の闘争として記述した。」と述べている。これ以降、ほとんどすべて

<sup>261</sup> K・レーヴィット『世界史と救済史』、信太正三、長井和雄、山本新訳、創文社、1964、p.211。

<sup>262</sup> 同上、p.204。

<sup>263</sup> 同上、p.214を要約。

<sup>264</sup> 同上、p.214。

<sup>265</sup> 同上、p.217。

<sup>266</sup> カール・ライムント・ポパー(Sir Karl Raimunt Popper、1902-1994)ロンドン大学哲学教授

の歴史の発展理論は、アウグスティヌスのこのマニ教的理論を下敷きにしている。近代のこの様な発展理論は、「アウグスティヌスの形而上学的あるいは宗教的カテゴリーを自然科学的あるいは社会科学的言語に翻訳している。たとえば神と悪魔を、生物学的によい人種と生物学的に悪い人種に代え、またはよい階級と悪い階級—プロレタリアと資本家に代える。しかしこれはこの理論の根本的な性格をほとんど変えるものではない。267」とポパーは述べ、レーヴィットとは異なる観点から、アウグスティヌスの歴史神学を土台にしている近代進歩史観を、発展理論と名付けて分析している。

### 第三節 『共産党宣言』と「史的唯物論の選ばれた民」

レーヴィットは、『世界史と救済史』において、マルクスの思想を彼の出自にまで遡及して、マルクスの思想の根底に潜む、「古いユダヤのメシアニズムと預言者主義、それにユダヤ的な飽くことのない絶対的な正義の固執」が、史的唯物論の理想主義的な土台を説明するものであり、「『共産党宣言』は、科学的な予言という顛倒したかたちで〈希望をよせるものにたいする確かな確信〉という信仰の特徴を、はっきりとどめている。」<sup>268</sup>と述べ、マルクスの思想を、次のように分析している。

二つの敵対する陣営の、つまり、ブルジョワジーとプロレタリアートとの最後の敵対が、歴史の最後の時期におけるキリストと反キリストとの最後のたたかいにたいする信仰に見あっており、またプロレタリアートの課題が、選ばれた民の世界史的な使命に類似しているのは、なんら偶然ではない。被抑圧階級の世界的な救済の役目は、十字架と復活との宗教的弁証法に見あい、必然の国が

---

267 R・ポパー「知による自己解放」、ライニッシュ編『歴史とは何か—歴史の意味』所収、田中元訳、理想社、1967、p.141-142。

268 K・レーヴィット『世界史と救済史』、信太正三、長井和雄、山本新訳、創文社、1964年、p.59参照。

自由の国へと変ずることは、古いアイオン<sup>269</sup>が新しいアイオンへと変ずることに見あっている。『共産党宣言』で叙述されているような全歴史過程は、歴史をば有意義な最終目標にむかう摂理による救済の出来事と解する、ユダヤ = キリスト教的な解釈の一般的な図式を反映している<sup>270</sup>。

「歴史的文書」である『共産党宣言』において、マルクスは、選ばれた民であるプロレタリアートの哲学を展開している。その文頭に「これまですべての歴史は階級闘争の歴史である<sup>271</sup>。」という命題を掲げている。つまりマルクスにとって歴史とは、抑圧する階級と抑圧される階級間における、社会的な敵対の青史なのである。彼は有史以来の歴史研究から「近代のブルジョア的私有財産は、階級対立、すなわち他の人間によるある人間への搾取に基づく生産物の生産と掌握を、最終的に、そしてもっとも完全に表現したもの<sup>272</sup>」であり、ブルジョア階級とプロレタリア階級という敵対する二大陣営へと階級対立を単純にした<sup>273</sup>、と主張している。このブルジョア時代の特色は、ブルジョア自らが「全社会関係をたえず革命することなくして生存することはできない<sup>274</sup>」ことで

---

269 上智学院新カトリック大事典編纂委員会『新カトリック事典』、研究社、2018、「アイオン」参照。( <https://www.kod.kenkyusha.co.jp> 2020年11月1日閲覧。) アイオンは、ギリシャ語：aiōn、英語：aeonと表記する。

アイオンとは、「新約聖書およびキリスト教思想における根本的な考え方、すなわち終末論的な見方を展開するために重要な概念。」である。

「今の世」(ho aiōn houtos) と「後の世」(ho mellōn aiōn) の対照(対立)は新約聖書の思想の基本構造となっている。パウロはガラテヤ書 1:4 で、「この悪の世(アイオン)」について語り、サタンを人の目をくらます「この世の神」と呼び、テトス書 2:12 では「この世で、思慮深く、正しく……生活する」ことを勧め、ローマ書 12:2 では信徒たちに「この世に倣ってはなりません」と警告している。「この世(アイオン)」の終わりについて、マタイ福音書 13: 39-49; 24: 3; 28: 20 およびヘブライ書 9: 26 に述べられているが、キリストは信者をすでにこの世から救い出し、「来るべき世」はすでに今の時のうちに始まっており、信者はこの賜物をすでに味わっている(ヘブ 6: 5) のである。

これらのことから、「二つのアイオンの対立についての考えは、パウロにおける霊と肉の対立と重なる側面をもっており、「来るべきアイオン」は「神の国」の考え方と一致すると結論できよう。」と説明している。

270 同様の指摘をA・トインビーも行っている。「マルクス主義が伝統的宗教から得たインスピレーションのなかで、はっきりユダヤ教から得たもの(或いは、もとはゾロアスター教のものだったかもしれないが)と判る要素は、暴力革命は、神自身の掟であるが故に不可避であり、神自身のわざであるが故に不可抗なものであって、プロレタリアートと支配的少数者の役割をすっかり逆転させ、神の選民をこの世の王国の最低の地位から一足飛びに最高の地位に引き上げるとする黙示録の夢想である。マルクスはヤーウェの代わりに「歴史的必然」を彼の全能の神とし、ユダヤ民族の代わりに近代西欧世界の内的プロレタリアートを選んだ。また彼のメシア王国はプロレタリアート独裁制という形で構成されている。しかし、この偽装の隙間からはっきりユダヤ教の黙示録の特徴がのぞいている。」特に、マルクス主義の動的要素は、キリスト教に起源を求めることができず、ユダヤ教に由来すると断定している。(A・トインビー『歴史の研究』第九巻、「歴史の研究」刊行会訳、経済往来社、1970年、p.270-273参照。)

271 カール・マルクス『新訳 共産党宣言』的場昭弘、作品社、2018年、p.43。

272 同上、p.57。

273 同上、p.43-44参照。

274 同上、p.46。

ある。「ブルジョア階級は、自ら自身のイメージにあわせて世界をつくっていく<sup>275</sup>」の  
であり、その創造された世界における「ブルジョア階級の存在と支配にとってもっとも  
本質的な条件は、富の私的なものの手への蓄積、資本の形成と増殖である<sup>276</sup>。」かかる  
資本の集積の進行に伴い、ブルジョア階級の「墓掘人」である賃金労働者が大量に生み  
出される。「今日の社会の最下層にいる<sup>277</sup>」「プロレタリア階級が、ブルジョア階級か  
ら自を解放するには、全社会を同時に搾取、圧迫、階級闘争から完全に解放しなければ  
ならない段階に達している<sup>278</sup>」とマルクスは、展開している。さらに「真に革命的なプ  
ロレタリア階級<sup>279</sup>」が引き受ける課題－暴力革命－は、階級闘争の最後の決戦であり、  
かつ歴史の必然であると明言している。

確かに、マルクスは、キリスト教における原罪と楽園を、原罪を土地の私的所有によ  
る搾取と置き換え、かつ楽園を太古の土地共有制社会－「原始共産主義社会<sup>280</sup>」へと

---

275 同上、p.47。

276 同上、p.55。

277 同上、p.54。

278 同上、p.229、一八八三年(ドイツ語版への)序文参照

279 同上、p.53参照。

280 マルクス エンゲルス『共産党宣言』大内兵衛、向坂逸郎訳、岩波書店、昭和49年、p.40-41、(二)〔原註〕(一八  
九〇年ドイツ語版へのエンゲルスの註)「共同の土地所有をもつ村落共同体は、インドからアイルランドにいたる社  
会の原型であることが発見された。そしてついに、氏族の真の性質および部族内におけるその位置に関するモルガン  
の称賛すべき発見によって、この原生的共産主義社会の内部組織の典型的な形が明らかにされた。この本源的な共同  
体の解体とともに、別々の、ついにはたがいに対立する諸階級への社会の分裂が始まる」と述べている。

エンゲルスは『家族・私有財産・国家の起源』(戸原四郎訳、岩波書店、1965、p31-110)で、モーガンは『古代社  
会』で、ネイティブアメリカンの家族の研究から先史時代を主に採取・狩猟生活を送る野蛮期と、牧畜・農耕生活を送  
る未開期とに分類し、－原始的共産制社会である階級へと分化する以前の－母系家族制を基礎とした氏族制度か  
ら、牧畜の発展に伴い私有財産の形成を見、さらに各期を「生活手段の生産の進歩に応じた」三段階に区分し分析し、  
人類進歩の主要な時期は全ての生活資源の拡大の時期と多かれ少なかれ直接に一致すると論じている、と述べてい  
る。

さて『経済学批判要綱』の「資本制生産に先行する諸形態」でマルクスが生産様式とよぶ経済生活の実質は、近代  
ブルジョア社会以前では、「共同体組織」として営まれてきた。この共同体組織の土地所有についてアジア的、古典  
古代的、ゲルマン的形態と三類型化し、歴史的なプロセスの結果生じた自然と人間との分離が、資本制社会において  
「賃労働と資本の関係において初めて完全なかたちでなされる分離」である、とマルクスは主張している。これら三  
形態において生産様式と生産力が一定の発展段階にいたると、共同体組織とこの共同体組織にもとづく所有は解体す  
る。換言すると、資本と、労働力と、労働力とを売る以外に生きることができない労働者の身体との分離は、過去のすべての共同  
体の破壊という歴史のプロセスを経て生まれるのである(この部分は『マルクスコレクション』所収『経済学批判要  
綱』「資本制生産に先行する諸形態」p.362-363の今村仁司による解説から示唆を得た。)、と展開している。

土地所有のアジア的形態では、自然発生的に生まれてきた原初の共同体組織が土地の所有者であり、個人は土地の  
占有者にすぎず土地に対する私的所有が存在しない。「個々人は共同体に対して自立した存在となっておらず、生活  
の範囲が自給自足的で、農業と手工業が一体となっている」。また、原初においては部族組織に帰する共同体組織  
は、ある部族が征服し従属させた他の部族を無所有にし、自己の再生産の非有機的条件的な一部としてしまう奴隷制と  
農奴制とは、部族組織にもとづく所有がさらに発展したものである。かつ、奴隷制ないし農奴制は本源的な所有の二次  
的形態であり原初的なものではない、と主張している。以上のように、労働の前提として現れる土地所有のアジア的  
形態において、大地は共同体組織の所有物である。つまり、奴隷制ないし農奴制が生じる以前のアジア的形態は、大  
地を共有し、搾取のない、階級のない、原始共産制社会と私は解する。加えて、アジア的形態は、原始共産制社会と  
階級社会の過渡的形態を論じているのである。(カール・マルクス『経済学批判要綱』「資本性生産に先行する諸形  
態」、木前利秋訳、『マルクスコレクション III』所収、筑摩書房、2005。)



置き換えている<sup>281</sup>。

また、主の誕生を分岐点とし、「異教的な紀元〈前〉とキリスト教的な紀元〈後〉に世紀を分割する」ことに対しては、世俗の世界における「意味ある歴史全体」を〈前史〉と未来史とに分ける〈瞬間〉である決定的な分岐点<sup>282</sup>について、歴史的文書『共産党宣言』が謳いあげる暴力革命による「プロレタリア独裁」を置き換えている。このことは、『世界史と救済史』の結語でレービットが展開する「キリストの出現は、……歴史の全過程と自然の進行とを一挙に疑問にさらす、独一無比な出来事である<sup>283</sup>。」との主張と正対している。

加えて『共産党宣言』で資本主義の発展が、階級対立を二極化し、ブルジョアジーとプロレタリアート間の階級対立の先鋭化を惹起し、最終的対立に至る過程においてプロレタリアートは、あらゆる生産手段、および社会から疎外されているとして、古いユダヤの選民思想を、プロレタリアート = 「史的唯物論の選ばれた民<sup>284</sup>」へと置き換えている。

---

281 「マルクスが搾取の事実を、彼の剰余価値説によって〈科学的に〉説明するとしても、〈搾取〉とは、依然として道徳的な判断にほかならない。搾取は、一定の正義の理念からすれば、絶対的な不義である。マルクスの世界史の叙述では、それは〈前史〉の根源的な悪、聖書的にいえば、現在のアイオーン〈時代〉の原罪いがいのなものでもない。」とレーヴィットは、搾取を原罪と断定している。(K・レーヴィット『世界史と救済史』、信太正三、長井和雄、山本新訳、創文社、1964、p.57-58参照)

282 マルクスは『資本論』第三部の「三位一体的定式」冒頭文の結語で「必然の国」と「自由の国」について次のように述べている。「必然の国」は、生命活動の維持のため、外的目的の労働による「本来の物質的生産の領域」にあり、どんな生産様式の社会でも存在する領域である。「必然の国」においても自由は存在する。この自由は、結合した労働者たちが「自然と物質代謝を合理的に規制し、自分たちの共同の管理のもとにおくこと」によってのみ存在する。「真の自由の国」は、「本来の物質的な生産の領域の彼岸」にあり、外的目的の労働が存在しなくなったところではじめて始まり、「必然の国」の上に「労働日の短縮」を「根本条件」として開花する。(『マルクス=エンゲルス全集 第25巻b』、大内兵衛、細川嘉六監訳、大月書店、1967、p.1049-1051参照)

ここでマルクスは、「必然の国」から「自由の国」へと至る過程における過渡期論について「必然の国」における自由と、「真の自由の国」のあり様を、自己の再生産、すなわち外的目的としての労働が廃絶したとき、すなわち労働が自己目的としての人間の全的解放に至る時に開花する、と主張していると私は解する。

さて、エンゲルスは『反デュリング論』において資本主義社会を「必然の国」と捉え、またプロレタリア独裁後の未来社会を「自由の国」と捉え、彼岸の国への移行を「必然の国から自由の国への人類の飛翔である。こういう世界解放の事業を遂行することが、近代プロレタリアートの歴史的使命である。」と述べ、プロレタリア独裁を歴史のメルクマールであると主張している。(『マルクス=エンゲルス全集 第20巻』、大内兵衛、細川嘉六監訳、大月書店、1968、「歴史的概説」p.289-292参照)

<sup>283</sup> K・レーヴィット『世界史と救済史』、信太正三、長井和雄、山本新訳、創文社、1964、「結語」p.248。

284 マルクスは『ヘーゲル法哲学批判序説』(マルクス『ヘーゲル法哲学批判序説』、三島憲一訳、マルクス・コレクション I』所収、筑摩書房、2005。)で労働の疎外について述べ、『ドイツ・イデオロギー』(マルクス『ドイツイデオロギー(抄)』、今村仁司、三島憲一、鈴木直、麻原博之訳、『マルクス・コレクション II』所収、筑摩書房、2008)ではプロレタリアートのみが革命の主体であることを断言している。「人間性を完全に喪失しているプロレタリアートは、社会の全領域から自らを解放するためには、社会の全領域を解放しなければならないという特殊な任務を体現している。」(『ヘーゲル法哲学批判序説』結語)この「いかなる自己活動からも完全に排除されている今日のプロレタリアートこそが、生産力の総体の奪取と自己の全的解放を獲得できる。」(『ドイツ・イデオロギー』p.118)「この奪取は、これまでいっさいをかなぐり捨てて立ち上がるプロレタリアートによる革命をもって実行される。」(『ドイツ・イデオロギー』p.119)さらに、「哲学者たちは世界をさまざまに解釈してきたにすぎない。重要なのは、世界を変革することである。」(『ドイツ・イデオロギー』p.161)、と展開し、『共産党宣言』において「真に革命的な階級はプロレタリア階級だけである」と断定し、変革主体である「唯物史観の選ばれた民」について語っている。(K・レーヴィット『世界史と救済史』、信太正三、長井和雄、山本新訳、創文社、1964、p.50-52参照。)

以上のように、マルクスの歴史哲学の根底には、直線行程の歴史観<sup>285</sup>、進歩史観、西欧中心史観が横たわっている。マルクスが『共産党宣言』で叙述しているような「全歴史課程は、歴史をば有意義な最終目標にむかう摂理による救済の出来事と解する、ユダヤ＝キリスト教的な解釈の一般的な図式を反映している<sup>286</sup>。」のである。

一方、ブランキは、自らを

近日点でのすさまじい膨張と遠日点での凍てついた収縮という両極性を持つこのいたずら好きの天体は、ソロモン王によって瓶の中に閉じ込められた、千夜一夜物語の巨人に似ている。彼はチャンスが来ると、見上げるような雲になって、少しずつ牢獄の外に拡散し、人間の形をとるが、そのあとで再び蒸発して瓶の細い首を通り、瓶の底に消えるのである。彗星は、始めに一〇億立方里の空間を満たし、次いで水差しの底に収まる。一オンスの霧なのだ<sup>287</sup>。

と描写し、バリケードで蜂起した民衆を領導するブランキ自身と、時々の権力に幽閉された自らとを、なぞらえている。

加えて、「VI 世界の起源<sup>288</sup>」で自らの心情を次のように繰り返し展開している。「彗星の死骸……が、何世紀も前から、我らが大気圏の柵につながれ、空しく自由もしくは歓待を求め続けている、哀れな囚人たちではないだろうか？ 曙光と黄昏の光の中で、両回帰線間の太陽に照らし出される、あの青白きボヘミアンたち。」と黄道帯に残された彗星の塵がはかなく瞬くことに、自らをなぞらえている<sup>289</sup>。かつ、「宇宙の謎は、常時一人一人の思考の前に突きつけられている。」「形ある一切のものは、つかの間の生命であり、やがて滅びゆく運命にある。なぜなら、破壊の時はすなわち復活の時であるから。」<sup>290</sup>「死滅した星の衝突と気化による世界の再生は、無限の領野において

---

285 横山四郎『歴史哲学』、慶應義塾大学出版会、2009、p.59 ユダヤ・キリスト教の信仰命題、「世界は一つである。人類は一つの同胞である。」「世界は永遠ではなく、神が無から創造したものである。そしてそれと一しょに神は時間もつくった。だから世界は一度きりの始めと終わりをもつ有限なものである。」という「歴史の過程を時間で刻む考え方」。

286 K・レーヴィット『世界史と救済史』、信太正三、長井和雄、山本新訳、創文社、1964、p.59。

287 オーギュスト・ブランキ『革命論集』、加藤晴康訳、彩流社、1991、p.223-225 「原始共産主義」1869年、p.47。

288 オーギュスト・ブランキ『天体による永遠』、浜本正文訳、岩波書店、2012、p.51-79 「VI 世界の起源」。

289 同上、p.40。

290 同上、p.59参照。

は、常時行なわれているのである<sup>291</sup>。」と、一挙的爆発としての革命の破壊と、再生とをなぞらえている。

私たちが、第三章において『天体による永遠』を分析し明らかにしたように、ブランキは、「天体による人類の永遠は、メランコリックなのである。」「過去は我々にとって野蛮の象徴であり、未来は進歩と科学と幸福を意味していた。だが、幻影にすぎない。」と『天体による永遠』で語り、永劫回帰理念に立脚し、終末論的世俗化の表現である、約束された未来の「進歩と科学と幸福」とを幻影にすぎないと捨象している。ここに、私たちが本章において論じてきたように、ブランキの永劫回帰理念と、マルクスの直線行程の歴史観との決定的な断絶を明らかにすることができた。

---

<sup>291</sup> 同上、p.69。

おわりに

ここまで、私たちが論じてきたように、ブランキの革命思想は、マルクス主義の露払いではない。またマルクス主義が乗り越えた思想対象でもない。ましてや、エンゲルスが主張するように、秘密結社に依拠した少数者の蜂起に還元できるものでもない。

今日まで、ブランキの思想を研究する人たちは、マルクスの思想体系との対比、あるいはブランキの革命思想にマルクスの影をいかに読み取るのか<sup>292</sup>、あるいはイギリスと比較して遅れていたフランスの資本主義の発展段階<sup>293</sup>に還元してブランキの思想を分析の俎上にのせてきた。しかし、本論文ではブランキの革命思想を、彼が執筆した『社会批判』、裁判記録、演説手稿等を取めた『革命論集』を基に、国家論、革命独裁論、民衆の情念の一挙的爆発としての革命というブランキの革命思想の特筆すべき点に加えて、『天体による永遠』の理論展開を分析することにより永劫回帰理念、反進歩史観、および反西欧中心史観の観点に立脚して論じた。今後は「永遠の反復」が表象する永劫回帰理念を念頭においてブランキ研究を進めることが求められるのだ。なぜなら、マルクス主義もまた「キリスト教救済史観の近代の変容」の一つ<sup>294</sup>にすぎず、その歴史哲学の根底には、直線行程の歴史観、進歩史観と西欧中心史観が横たわっているのだから。

さて、夢を語らないブランキは、ベル・イールの監獄で無数の「分岐点」の先にユートピアを、唯一の未来を、「秩序立った無政府状態」を覗つつ「そのユートピアはいつ誕生するのか？」と我々に問いかけている。民衆の一挙的「発酵暴動<sup>295</sup>」の永遠の反復をめぐり、およそ百年の時をへだてて、バチコは「革命の経験は、すべての学校が何世紀もかけても民衆に教えることのできなかつたことを、わずか数年の間に教えられるという証拠を見せつけた。」「新しい人間を造ることは、連続としての歴史でなく、断絶

<sup>292</sup> 伊藤満智子「ブランキ研究の視角について」、現代史研究(24) 96-101、1970-06、p.96-97。

<sup>293</sup> ガローデイ『近代フランス社会思想史』、平田清明訳、ミネルバ書房、1958年、p.414-415、p.432 ブランキの浅薄な経済理論は、七月王政と第二帝政の投機的金融の様相といった資本主義の不十分な発展度に照応したものであり、「フランスでは資本主義がおくれて発展したので、資本主義制度とその諸矛盾の分析、および、真の科学的方法の要請に答えるその克服の条件の分析をおこなう仕事は、一八四八年にははやくも《古典的な》形態でこの資本主義が存在していたイギリスでの資本主義制度を分析した理論家〔マルクスとエンゲルス〕の手に、ゆだねられた」とガローデイは述べている。

<sup>294</sup> 神山四郎『歴史哲学』、慶應義塾大学出版会、2009、p.59-69「キリスト教の救済史観」及び「救済史観の近代の変容」を参照、「世界は永遠ではなく、神が無から想像したものである。それと一緒に神は時間も作った。故に世界は一度きりの始めと終わりを持つ有限のものである」というキリスト教の信仰命題の一つから後戻りすることのない「直線行程の体系」と呼ばれる歴史観が出来上がった。弁証法は否定の否定によって肯定にかえる単なる理論の操作であったが、ヘーゲルとマルクスがそれを時間における事物実体のは発展過程としたとき、歴史の論理となった。

<sup>295</sup> 前出の脚注199 第二章 第三節 1850年ベル＝イール＝アン＝メールの牢獄で書かれた「ブランキの手記」から。

としての歴史を生きることによって可能だった」、「一九六八年五月には、私たちはそう信じることになるだろう」<sup>296</sup>と語り、イタリアで「アウトノミア<sup>297</sup>(Autonomia)」の先頭で活動してきたアントニオ・ネグリ(Antonio Negri, 1933 -)は、国民国家を超越したマルチチュード(Multitude)と呼ぶ革命の主体を定義し<sup>298</sup>、「〈帝国〉<sup>299</sup>」による生産と支配の時代のなかにあつて、時間の資本主義的リズムに対抗して闘うということ。そこに唯一の真のユートピアが存在すると主張している。彼は、革命における暴力を肯定しつつも、Multitudeが自己を確立しないままにアイデンティティを廃棄してしまうと、自らが持っていた、いわゆる正邪の境界線、および善悪の判断基準を見失ってしまうことに対して、次のように鋭く警鐘を鳴らしている。

革命家たちの前に立ちふさがる最も恐ろしい暴力は、アイデンティティ政治の革命的潮流のなかに見られる怪物的な自己変容なのかもしれない。自分が何者であるかを置き去りにしたままアイデンティティを廃棄することこそ、ジェンダー……その他のアイデンティティの座標のない新しい世界を構築することは、途方もなく暴力的なプロセスだ。それは、単に一步進むたびに支配権力がその歩みを阻止すべく戦いを挑んでくるだけでなく、私たち自身が自らの核をなす同一化のプロセスのいくつかを廃棄し、怪物にならなければならないのである<sup>300</sup>

と。

フランスでは、ネグリの語るMultitudeが、黄色いベスト運動(Mouvement des Gilets jaunes)を闘う民衆の形態として出現し、2018年11月から反政府・非議会・街頭行動を継

<sup>296</sup> B・バチコ『革命とユートピア』、森田伸子訳、新曜社、1990、p.461。

<sup>297</sup> 大辞林から、原義は自律自主の意、1970年代にイタリアを中心として、学校工場街頭での自治権の確立を目指して行われた社会運動。空家占拠や海賊放送などを伴った。中心的指導者は政治哲学者 A=ネグリ。

<sup>298</sup> アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート『マルチチュード 上』、幾島幸子他訳、日本放送出版協会、2005年、p.18-26 参照 マルチチュードとは、異なる文化・人種・ジェンダーなどのすべての特異な差異から成る多数多様性であり、その多様性が内的に異なるものでありつつも、互いにコミュニケーションしつつ共に行動することができるのかという課題を有し、労働者階級とは区別された多様な社会的生産の担い手すべてを潜在的に含んでいる概念である。

<sup>299</sup> アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート『〈帝国〉』、水嶋一憲他三名、以文社、2003、p.3-4 資本主義的な生産と交換のグローバル化によって国民国家の主権が衰退し、主権が新たな形態を取るようになった。これは、単一の支配論理のもとに統合された一連の国家的かつ超国家的な組織隊からなるものであり、ネグリとハートはこれを〈帝国〉と呼んでいる。

<sup>300</sup> アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート『コモンズウエル 下』水嶋一憲他、NHK出版、2012、p.268 参照 ネグリは「怪物的な自己変容」について具体的には述べていないが、赤い旅団、バーダー・マインホフ・グループ（及び連合赤軍）等を示唆していると私は解している。

続している。さらに、2019年末からは、マクロン大統領の年金切り下げ政策に反対する交通関係労働者のゼネストが闘われた。また、2019年にMultitudeは、香港においても確とした指導部を有しない民衆デモとして出現し、香港政庁に対して激しい街頭抗議行動を長期間繰り広げ、かつ香港区議会議員選挙で圧倒的多数の議席を獲得した。

一方、我が国においては、大多数の若者は政治への関与を忌避し、まして街頭へ繰り出すこともない現状を鑑みると、この素因の一つに1968年から始まった熱い政治の季節の総括の不十分なことを指摘できるであろう。加えて、連合赤軍による「総括」という殺人、さらに「唯物史観の選ばれた民」がいみじくも実践した、いわゆる「革命的党派」間の「党派闘争」に関する極めて悲惨な行為等に関して、私たちの総括が全く不十分であることにもその一因があると、私たちは考えている。再度、私たちはネグリの警鐘を熟考すべきである。

かつて、我々は問われたが、意識から捨象しつつも記憶の底に澱のように沈んでいた、あの熱い政治の季節の総括を遅ればせながら始めることが、私たちに求められているのだ。ブランキが語るように「我々の子孫たちにしか残されていない進歩を」その手につかむために。

## 文献目録

### ブランキ著作

オーギュスト・ブランキ『ブランキ 革命論集』、加藤晴康訳、彩流社、1991年。

オーギュスト・ブランキ『天体による永遠』、浜本正文訳、雁思社、1985年。

オーギュスト・ブランキ『天体による永遠』、浜本正文訳、岩波書店、2012年。

### ブランキ研究

加藤晴康「ブランキと武装蜂起」、『現代の眼』1970年2月号、p84-91、現代評論社、1970年。

M・アバンスール「幽閉者の解放」、『天体による永遠』所収 p.155-219、浜本正文訳、雁思社、1985年。

ガローディ『近代フランス社会思想史』、平田清明訳、ミネルバ書房、1958年。

ジェフロア『幽閉者』、野沢協、加藤節子訳、現代思潮社、1973年。

S・モリニエ、S-L・プーシュ『コミューンの炬火—ブランキとプルドン』、栗田勇、浜田泰三訳、現代思潮社、1963年。

### 参考文献

#### \* 和書

河野健二編『資料フランス初期社会主義』、平凡社、1979年。

河野健二編『プルドン・セレクション』、平凡社、2009年。

神山四郎『比較文明と歴史哲学』、刀水書房、1995年。

神山四郎『歴史哲学』、慶應義塾大学出版会、2009年。

神山四郎『史学概論』、慶應義塾大学出版会、2011年。

五島茂、坂本慶一責任編集『世界の名著 続 8 オーウエン サン＝シモン フーリエ』、中央公論社、1980年。

小牧近江「三色旗か赤旗か—革命家ブランキの生涯とその周辺」、『ジャコバンの精神』所収、鹿砦社、1979年。

柴田三千雄『バブーフの陰謀』、岩波書店、1968年。

柴田三千雄他編、世界歴史大系『フランス史2、3』、山川出版社、1996、1995年。

柴田三千雄『近代世界と民衆運動』、岩波書店、2001年。

柴田三千雄『フランス革命はなぜおこったか』、山川出版社、2012年。

平實『フランス労働者政策史論』、晃洋書房、1976年。

谷川稔『フランス社会運動史』、山川出版、1983年。

谷川稔、渡辺和行『近代フランスの歴史』、ミネルバ書房、2006年。

編集代表田村秀夫、田中浩『社会思想事典』、中央大学出版部、1982年。

長崎浩「ブランキスト百年—私のブランキ」、『結社と技術』所収、情況出版、1971年。

西川長夫『パリ五月革命私論』、平凡社、2011年。

福井憲彦『ヨーロッパ近代の社会史』、岩波書店、2005年。

村岡健次他編、世界歴史大系『イギリス史2、3』、山川出版社、1990、1991年。

\* 和訳書

エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』、戸原四郎訳、岩波書店、1965年。

エンゲルス『ブランキ派コミュン亡命者の綱領』、『マルクス＝エンゲルス全集 第18巻』所収、大内兵衛、細川嘉六監訳、大月書店、1968年。

エンゲルス『反デューリング論』、『マルクス＝エンゲルス全集 第20巻』、大内兵衛、細川嘉六監訳、大月書店、1968年。

ジャン・カスー『1848年 - 二月革命の精神史』、野沢協監訳/二月革命研究会訳、法政大学出版局、1979年。

シュタイン『平等原理と社会主義』(*Der Sozialismus und Communismus des heutigen Frankreichs*)、石川三義、石塚正英、柴田隆行訳、法政大学出版局、1990年。

A・J・トインビー『歴史の研究』、第九巻、「歴史の研究刊行会」訳、経済往来社、1970年。

トクヴィル『フランス二月革命の日々』、喜安朗訳、岩波書店、1988年。

アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート『<帝国>』、水嶋一憲他訳、以文社、2003年。

アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート『マルチチュード 上下』、幾島幸子他訳、日本放送出版協会、2005年。

アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート『コモンズウエル 上下』、水嶋一憲他訳、日本放送出版協会、2012年。

プロニスラフ・バチコ『革命とユートピア』、森田伸子訳、新曜社、1990年。

プルードン『所有とは何か』、『プルードンⅢ』所収、長谷川進、江口幹訳、三一書房、1971年。

プルードン『連合の原理』、『プルードンⅢ』所収、長谷川進、江口幹訳、三一書房、1971年。

ヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論 I』、今村仁司、三島憲一訳、岩波書店、1993年。

ヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論 V』、今村仁司、三島憲一訳、岩波書店、1995年。

アンドリュー・ポーター『帝国主義(ヨーロッパ史入門)』、福井憲彦訳、岩波書店、2006年。

『マルクス＝エンゲルス全集 第20巻』、大内兵衛、細川嘉六監訳、大月書店、1968年。

『マルクス＝エンゲルス全集 第25巻 b』、大内兵衛、細川嘉六監訳、大月書店、1967年。

カール・マルクス『共産党宣言』、的場昭弘訳、作品社、2018年。

マルクス エンゲルス『共産党宣言』、大内兵衛、向坂逸郎訳、岩波書店、2019年。

マルクス『ヘーゲル法哲学批判 序説』、三島憲一訳、『マルクス・コレクション I』所収、筑摩書房、2005年。

マルクス『ドイツ・イデオロギー(抄)』、今村仁司、三島憲一、鈴木直、麻原博之訳、『マルクス・コレクション II』所収、筑摩書房、2008年

マルクス『経済学批判要綱』「資本制生産に先行する諸形態」、木前利秋訳、『マルクス・コレクション III』所収、筑摩書房、2005年。



ゴロー・マン「歴史哲学の根本問題」、ライニッシュ編『歴史とは何か - 歴史の意味』所収、田中元訳、理想社、1967年。

ポール・リクール『イデオロギーとユートピア-社会的想像力をめぐる講義』、ジョージ・テイラー編、川崎惣一訳、新曜社、2011年。

K・レーヴィット『世界史と救済史』、信太正三、長井和雄、山本新訳、創文社、1964年。

K・レーヴィット『歴史とは何か - 歴史の意味』、田中元訳、理想社、1967年。

K・レーヴィット『ある反時代的考察』、ベルント・ルッソ編、中村啓、永沼更始郎訳、法政大学出版社、1992年。

#### 研究論文

伊藤満智子「オーギュスト・ブランキと7月王政期の共和派運動」、『歴史学研究』363号、p.16-30、1970年。

伊藤満智子「ブランキ研究の視角について」、『現代史研究』24号、p.96-101、1970年。

柴田朝子「十九世紀フランスの革命思想-オーギュスト・ブランキを中心として」、岩間徹編『変革期の社会』所収 p.89-112、御茶の水書房、1962年。

鈴木雅雄「星々は夢を見ない-オーギュスト・ブランキに関する覚書」、早稲田大学大学院文学研究科紀要 第2分冊 53、p.3-16、2007年。

高草木光一「オーギュスト・ブランキにおける革命の主体：「デクラセ」概念の再検討」、『三田学会雑誌』Vol.77,No.4(1984.10),p547(73)-562(88)。

高草木光一「政治革命と総合的アソシアシオン」、『アソシアシオンの想像力』所収 p.81-117、平凡社、1989年。

谷川稔「『産業帝政』下における労働運動の再生」、河野健二編『フランスブルジョア社会の成立』京都大学人文科学研究所報告所収 p.74-204、岩波書店、1977年。

平井新「ブランキの階級闘争説とプロレタリア独裁説」、『三田学会雑誌』Vol.25,No.2(1931.2),p203(75)-258(130)。

平井新「フランス革命と社会主義」、『三田学会雑誌』Vol.40,No.7/9(1947.9),p426(60)-451(85)。

平井新「ブランキに関する断片」、『三田学会雑誌』Vol.54,No.3(1961.3),p159(1)-177(19)。

平井新「若きマルクスとサン・シモニスム：マルクシズムとフランス社会主義との関係に関する研究の一節」、『三田学会雑誌』Vol.55,No.3(1962.3),p209(1)-234(26)。

道旗泰三「万華鏡の破碎のあとに-ベンヤミンにおける永劫回帰と弁証法イメージ」、ドイツ文学研究(1994),39:131-187。